

東方異戰線

albtraum

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とても平和な世界で魔理沙は死んだ。

そんな魔理沙が生き返るために別の世界で頑張る話。

目次

東方異戦線 第十二話 天狗の戦い 80

東方異戦線 第一話 取引

東方異戦線 第二話 戰場へ

東方異戰線 第三話 強襲者

東方異戦線 第四話 剣士

東方異戰線 第五話 救世主

東方異戦線 第六話 疑い

東方異戰線
第七話 奇襲

東方異戦線
第8話
尋問の始まり

東方星城錄 第九話 尋問

東方異聞錄 第九話 尋問

東方異戰錄 第十話 瞬け

東方異聞線 第十一話 二人の天狗

57

東方異戦線	第十三話	冷血
第十五話	第十四話	やつてくる物①
やつてくる物②	やつてくる物③	——
		92

第十三話	冷血	—
第十四話	やつてくる物	①
第十五話	やつてくる物	②

東方異戦線 第十五話 やつてくる物②

第十五話 やつてくる物②

112 107

99

72 65

東方異戦線 第一話 取引

拝啓

博麗靈夢殿。

私はインクを付けた万年筆を紙の上で走らせ、そう綴つた。

その字は達筆とは言えないが、全く読めないというわけでもないぐらいの字であり、普段私があまり上手に字を書いてないということがそれだけで分かる。

それでも私は万年筆を動かし、ガリガリと小さな音を立てながら文字を書き、彼女に自分の気持ちが伝わるように文脈だけは丁寧にしようと心掛けながら書いていく。

これをあなたが読んでいるとき、私は死んでいるだろう。

ここまで書いて、この遺書の始まり方がテンプレ過ぎないか？と思うが、遺書を書いていて私はこの文脈や書いている遺書自体に違和感を覚える。

遺書とは家族や友人に死ぬ前に残すものではないだろうか？と。ここまで言えば、皆も私の置かれている状況を察してくれるだろう。そう、

私は、死んだのだ。

いつも通りに平和で、博麗神社で靈夢と他愛のない話をし、一緒に飯や酒を飲み食い

して自宅に向かつて箒で飛んでいた。

そうしていた時、私はいきなり後ろから誰かに強く押された。いきなりのことで困惑して箒から手を放してしまい。私はそのまま箒を離れて落下した。魔力を使って空を飛ぼうとしたとき、私は地面にすごい速度で叩きつけられ、即死したのだ。

それについての気持ちの整理も終わってはいないが、とりあえず遺書を書くためにほかの言葉を使おうと、紙から目を放して私が顔を上げると、自称神と名乗る“彼”と目が合つた。厳密には、彼が着けている仮面の目とだが。

真っ白で色鮮やかさはない物の、“彼”的の髪の毛は純白で何にも染まっておらず、語彙力の無い私はその髪を見て綺麗と言う表現以外が浮かんでもない。

顔についている仮面を“彼”が頸のあたりを持ち上げて仮面を外し、ガラスのように透明な素材でできている机の上に置き、再度、私を見る。

「…クスクス」

彼も素顔は思つていた以上に人間で、アルビノのような赤い瞳と髪の毛を持つていて、病人のようにも見えなくはない。

そう思つていた私と目が合つた“彼”は口角の端っこをほんの少しだけ上げて、ニヤリと笑う。

「…なんだよ…何がおかしいっていうんだよ」

文字を書いていたことで自分が死んでしまったという現実を突きつけられてしまい。

私は瞳に溜まっていた涙がこぼれてしまう。

ゆっくりと頬を流れ落ちる涙が顎のあたりで水滴となつて落ちた。真下で遺書を書いていた紙に涙のしづくが落ちて紙を濡らし、その水気のせいでインクで書いていた文字が滲み、歪んだ。

「…いやいや、今まであつて来た君とは違う反応だつたから、意外と新鮮でね」

“彼”はそういうながらも笑うのをやめず、ニコニコと笑つている。

“彼”的他の君と言う言い草から、私がいた世界とは異なる。いわゆるパラレルワールドという世界が存在するのだと。こういう話は好きであるため、なんとなく察せた。

後ろを見ると、大量に並んだドアが何の支えもなしに地面に立つていて、それが地平線のかなたまで続いている。もしかして、これが全てパラレルワールドだというのだろうか。

「…」

まあ、そんなことはどうでもいい。

これが靈夢に届くかはわからないが、私は遺書を書きあげなければならぬのだ。
「必死になつて遺書を書いてるけど、もし…生きて帰らせてあげなくもない……僕がそう言つたら君はどうする？」

“彼”がそう言つたとき、何かをひつかいているような独特な音を出させながら万年筆を走らせていた私の手の動きが止まつた。

私が紙に向けていた視線を“彼”に向けると、自分が提案した暗に私が興味を持つたのがうれしかつたのか、なんだかはわからないが。予想通りと言いたげな“彼”は面白いおもちゃを手に入れた子供のように“彼”は笑みを浮かべた。

「……その話……嘘じやあないよな？」

こいつにかかるとろくなことがないと私の頼りない感がそう言つている。でも、生き返らせてくれるのは願つてもいないチャンスと言える。

「…ああ、僕は嘘はつかないさ…でも、それには条件がある」

やつぱり取引が来たかそう簡単には生き返らせてはくれないらしい。でも、自称神を名乗つている“彼”はおそらく本物の神だ。物理の法則さえもぶつちぎつて私のことを生き返らせることができる奴が、こんなちっぽけな存在である私に何を求めるというのだろうか。

「お前は金に困つてゐるわけじやあないだろう?…そもそも、通貨という概念がこの世界に存在してないよう見えるし……それに、欲しいものがあるわけでもない。……だから、私にはお前が満足できるようなものは持つてはいないぜ?」

物々交換でもするのかと思い、そう言つた私に“彼”はふつと鼻で軽く笑うと、どこ

からかコーヒーの入ったカップを二つ取り出し、私に片方を差し出してきた。

私は差し出された受け皿とその上に乗っているカップを両手で落ちないように受け取り、書いていた遺書の横に置く。

入れたてのコーヒーのように白い湯気がゆっくりと立ち上っていて、コーヒーのいい匂いが私の鼻孔を刺激する。

「金か、君の言う通り……この世界にはそんなものは存在しない。……作り出せないことはないけど、あつても使う場所も使うための物も存在しないわけだ……そして、それは君を助ける理由につながるわけさ」

“彼”が回りくどく説明をはじめ、なんだかよくわからないことを話し始める。

「？……ぐだぐだ回りくどいことはいいから、早く説明してくんないか？」

「……君も神に向かつてよくそんな口が利けるよね……その神経だけは見上げるよ……まあ、いいや……この場所は見た目通りで何もなくてね……人為的に音を出さなければ何の音も発生しないし、何かが生まれることもない。だから、君たちがいるような世界を眺めて暇をつぶすわけだけど、楽しそうなのを探すのも一苦労なんだよね」

初めはぶつぶつと文句を言つていたが、また回りくどく説明をし始める。

「……まさか、一緒に暇つぶしをしろとか言うんじやあないだろうな？」

私が聞くと“彼”は小さく首を横に振り、手に取ったカップに口をつけて一口だけ

コーヒーを飲んだ。

カチャツと陶器と陶器が合わさる甲高い音を出しながら、『彼』はカップを受け皿に乗せると私の言葉をすぐに否定した。

「そんなわけがないだろう？ だって……もしそうなら、一生という時間をこの場所で過ごしてもらうことになるけど？」

『彼』はゾツとするようなことを言い、ニコリと笑う。こんな何もなくつまらない場所に一生なんて、暇すぎて死んでしまうだろう。

「…それは…」、断らせてもらうぜ」

貰ったコーヒーを飲もうとカップに目を向けると、黒色と茶色がわずかに混ざったような水面に、ひきつった私の顔が反射して見える。

ミルクが入つておらず、透明度が少し低くなつたコーヒーを飲むと、コーヒーの独特な香りが鼻から抜け、舌に砂糖の入つていないコーヒーの強い苦みを感じて私は眉をひそめてカップを受け皿に戻した。

「…それでだ、…君が生き返るために僕からの条件は、とある異変を解決してほしいんだ。僕の暇つぶしのためにね」

『彼』はそう言いながら、またどこからか透明な入れ物を取り出し、机の上に静かに置いた。

入れ物の中にたくさんの角砂糖が入つていて、ガラスでできた蓋を取つて中から角砂糖をいくつか取り出してコーヒーの中に落とす。

「…異変？…あのな、お前は知らないだろうけど：私の世界では異変何とほとんど起きない。だから：私は異変の解決経験はほとんどないって言える：そんな私で異変を解決できるかわからないぞ？」

私は角砂糖の入つている入れ物に手を伸ばしながら、『彼』に言うと、『彼』は静かに、そして淡々と私に告げた。

「…くたばつたのならそれまでさ、そこで終わり」

彼の冷たい言葉に、私の角砂糖を取ろうとした私の手の動きがぴたりと止まる。

「…」

『彼』の視線を感じた私が角砂糖の入つた入れ物に向けていた顔を『彼』の方向に向けると、光の無い瞳と目が合つて私は小さく身震いして伸ばしていた手も引っ込めた。

「…?…別に驚くことじやないだろう？…生き返れるか生き返れないかは君次第であるわけで、生き返るためには試練がある。失敗したらそこで終わり、それはお約束だろう？…神話なんかでよくあるだろ？…神が英雄に向けて試練を出す、みたいな」

そう呟く『彼』の表情からは何も読み取れず、私は手を引つ込めて縮こまつたまま息

をのんだ。平和ボケした私が思つてゐる以上に、優しくない状況らしい。

「まあ、話を単純にするなら、生き返るチャンスが欲しいのなら…そつちの扉に行くと良い」

『彼』が扉がたくさん並んでいた方向を指さすと、たくさんの扉が並んでいる場所の一部の扉が左右に動いて道を作り、その先に扉が一つ現れた。

「…そして、チャンスはいらす…死にたいっていうのならそつちにいるアトモス君にあの世に連れて行つてもらうといいよ」

『彼』はたくさんの扉が並んでいる方向とは逆方向を向き、数メートルはある巨大な門の方を見る。

「…」

すると、ギギギ…つと鉄なのか木なのか、見た目では判断できない材質の扉がわずかに開き、その間から鋭い狼の目のようなものが見え、私の体がすくんでしまう。

「チャンスをつかむか、蹴るかは君の自由だ…でも、やるかやらないかは今決めてくれ」

『彼』はそういって完璧に蛇に睨まれた蛙のように固まってしまっている私を見て、小さくため息をつく。

「…まったく、ヘタレだねえ…アトモス君…少しの間、君は下がつていってくれないか？」

“彼”がそう言うと鋭い目つきで暗闇に浮かんだ眼球が扉から離れて行き、アトモス君が離れた扉もゆっくりと静かに閉じてアトモス君との視線が途切れた。

「…君に、やるかやらないかは…聞くまでもないみたいだね…多少の葛藤はあるみたいだけど、やるんだろう？」

「…ああ…当たり前だ。あいつの場所に行くなんて、怖すぎて私にはできん…それにやり残したことが多すぎてまだ死ぬわけにはいかないぜ」

アトモス君が消えて行き、閉じられた巨大な門を見つめながら私は言つた。もしかしたら、また異変で死ぬかもしれない。でも、チャンスがあるならそれにすがりたい。

私は覚悟を決めて、 “彼” の条件を飲んだ。

東方異戦線 第二話 戰場へ

「…異変の解決…やるんだろう？」

「…………ああ」

異変を解決するという申し出に対してもアトランチスは樂しみが一つ増えて満足そうな顔をしている。微笑して表情に笑みをわずかに含めた表情で“彼”は話を切り出した。

「…それじゃあ、君には異変の解決に向かってもらうとするかな」

“彼”はそう言いながら角砂糖の入ったコーヒーを鉄製の小さなスプーンで、円を描くようにしてかき混ぜる。

「…異変……か、私が今から行くところはどんな世界なんだ？」

私が聞くと“彼”は湯気が立つてゐるコーヒーを一口飲み、一息つくとさらに透明の入れ物から角砂糖をいくつかカップの中に放り込みながら言つた。

「君がいた世界とは：基本的なところは変わらないかな：すぐ真横のパラレルワールドだからね……ただ、君が今から行く世界にも霧雨魔理沙は存在する……だから君を送り込むと同じ人物が二人いることになっちゃって、とてもややこしいことになるから……

君がそつちにいる間は、もともといた方の霧雨魔理沙にはこつちに来ていてもらうとしようかな」

“彼”はそういうとまたどこからかミルクを取り出ると、コーヒーの中に注いだ。

「…それはわかつたが…私が解決する予定の異変はどんな感じの異変なんだ？」

私が聞くと、“彼”はコーヒーの入ったカップに口をつけ、カップを傾けて一気に中身のコーヒーを飲み干した。

「…ふう…行つてみればわかるさ…情報は君が自分のその足で歩いて集めてくれ

“彼”は手に持つたカップを受け皿に置き、息を吐きながら私に言う。

「…どうせ異変の内容を把握してないとかだろ？」

私がそう聞くと “彼”は無視を決め込んだ。

「……。おつと、君が行く世界にいる霧雨魔理沙がちようど一人で行動しているようだ…ちょっとこつちに来てもらうとするけど、一つ問題ができた」

「…問題？…どうしたんだ？…そんなに深刻な問題なのか？」

私が聞くと、少し面倒くさそうな顔をした “彼”が、はあつと小さくため息をつきながら人差し指を空中に向け、円を描くように一回転させた。

すると、私のすぐ横の空中に黒い穴が出来上がり、そこから私と全く同じ格好、同じ顔の人物が降りてきた。彼女の体が地面から十センチ程度の高さで静止し、重力が働い

ていないうように空中に浮かんだ。

目を閉じたまま微動だにしないもう一人の私は眠っているらしく、目を閉じて一定の間隔でぶれることがなく呼吸を繰り返している。

「…どうして眠っているんだ？」

「僕が眠らせたのさ、起きていたら面倒だろう？それと、問題が起きたつてさつき言つてたけど、こつちの世界の霧雨魔理沙は君とはだいぶ体形が違うようだね」

“彼”に言われて改めてもう一人の自分を見直すと、彼女の身長は十センチ以上も私よりも高く、出るところは出て引っ込むところは引っ込んでいる。いわゆるナイスバディなポンッ！キュッ！ポンッ！な体型なわけだ。それに、顔立ちも整つっていて、キリツとしたその顔は私とは似ても似つかない。

「……」

私が自分の体を見下ろすと、ナイスバディとはかけ離れた体が目に映し出され、社会の格差のようなものを一時的に味合わせられた。

「…同じ年とは思えないな」

もう一人の私をまじまじと見つめながら “彼”は私に言い、私は無意識のうちに歯ぎしりをしていた。あまり気にはなかつたが、いざ面と向かつていわれるところでもムカつく。

「…っち……」

舌打ちをした私を見て、『彼』はフフッと意味ありげに笑うと、椅子から立ち上がった。

「…君のそのままの身長と童顔で行つたら速攻でバレるね。だから、今回は特別に君の姿を彼女の姿に似せてあげよう」

『彼』がそういいながら指をパチンと鳴らすと、私の体に変化が起こり始める。目線の高さが高くなつて、『彼』と同じかそれ以上にまで身長が伸び、まな板のように絶壁だつた胸に膨らみができる、余裕で掴めるぐらいには丸みを帯びている。

「はい、OKだよ」

『彼』がそういうと私と眠つてゐるもう一人の私を交互に見てうなづく。

「…いい出来だね、顔立ちから身長、体の質感まで同じにしたから…君がボロを出してバレるか、よほど勘のいい人じやないと気が付かないと思うよ」

『彼』は自信があるのか、そう言い切る。

「…本当にバレなさそうか？」

「大丈夫大丈夫…。寝てる彼女は僕がなんとかしておくから、君はこの霧雨魔理沙がいた世界に行つて来て」

『彼』は自分が座つていた椅子に座ると、しつしと手を動かして早く行つてこいと促

してくる。

「へいへい、もういくさ…………た、行くのはいいんだが、私が異変に介入して大丈夫なのか？」

「うん、大丈夫…もしかしたら君がいなければ異変を解決できないかも知れないんだよ？」

“彼”は私にそう言いながら今度は独特な香りを漂わせる紅茶をどこからか取り出し、入れ物から角砂糖を取つて紅茶の中に投入した。

「買いかぶりすぎだぜ…それと最後に聞いておきたいんだが、こいつのいる世界で起こつていてる異変…それは私の手に負えるレベルの異変なのか？」

「…君なら大丈夫だよ、下手をしたら死ぬぐらいのレベルだから見た限りではそうでもなかつたと思うけど」

“彼”はそういうながら紅茶の入つたカップを持ちあげて紅茶を一口飲み、もう質問は受け付けないぞと言うように鼻歌を歌い始める。

「…はあ、…わかつたお前を信じよう」

私はため息をつきながら “彼” がしていした扉のところまで歩いて行き、ドアノブを握つて捻りながら押した。

「それじゃあ、頑張つてね」

“彼”的愉快そうに笑うような声が聞こえてきたと思ったころ、強い力でドアの中に引きずり込まれ、私は明るすぎて何も見えない場所に放り出され、意識が消失した。

東方異戦線 第三話 強襲者

拝啓

博麗靈夢殿へ。

私は、生き返るためにパラレルワールドの異世界に来て います。死んだ私が生き返るためにこうするしか方法がないわけですが、初っ端から心がへし折れそうです。

“彼”が提示してきた生き返るための条件を飲んだことを私は早々に後悔し始めていた。

空気が強く私の頬を叩き、したに向かつて流れしていく。方向的には上方向に風が向かつているわけだが、私が下に向かつて降下していくため、そう感じるのは仕方のないことだ。

視界いっぱいに広がる大地が私に向かつて迫つてくるのが見える。詳しく言えば向かっているのは私であるわけだが、そんなことはどうでもいい。

「…………」

地球の重力によつて私の体は空気抵抗によつてわずかに速度を減衰しながらも加速を続け、幻想郷の外にある車と呼ばれる代物が出す速度を軽く超えた超高速な速度で地

上に向かつてゐる。

「出す場所を考えろ!! バカやろ——————つ!!」

私はこの場にいるわけではない。あの世とこの世の境にいる。彼に向けて力いっぱい叫びながら、現在向かっている地面の方向に魔力を放出して雲の上まで余裕で行けるほどの推進力を使つて減速を図つた。

手足から出す魔力の放出力の強さが強すぎると、急激に減速した影響で腕を胴体につないでいる肩や、胴体に足がつながっているための関節が脱臼してしまったため、魔力の放出は繊細に、かつ慎重に調節しなければならない。

— 2 —

体が落ちるスピードが落ち始めるが、魔力の放出量が多すぎたのか肩がビキリと痛む。だが、その痛みのおかげなのか、だいぶスピードが落ち始める。

眼下の地面から生えている木の葉っぱの一枚一枚が目視できるほどまでに地上との距離が近くなり、私は着地をしやすいように体勢を変える。

スピードは最大限まで緩めたつもりだったが、それでも意外と早い速度で草木をかき分けて私は地面に降り立つた。

地面上に向けて魔力を放出していたため、私を中心にして水たまりに水滴を落とした波紋のようなくぎが流れ、木の葉っぱや雑草などの草を大きく揺らす。

「……つ痛……危なかつたな……」

着地の衝撃でビリビリと痺れる足をさすりながら独り言をつぶやいた私は、痺れる足に魔力を送り、骨や筋肉の痛みと打撲の痛みを和らげさせた。

もう少し落ちる速度が早かつたら、運が悪ければ脱臼もしくは骨折をしていた可能性がある。今後はもう少し慎重にならなければならないかもしない。

「……さてと……」

改めて周りを見回してみると私が降り立った場所はだいぶ深い森の奥らしく、人の気配がしない。こっちではわからないが幻想郷で人が寄り付かない場所と言えば魔法の森などがあげられる。野生生物の姿すら見えないとなると魔法の森のどこかなのかなのは確かなのだろう。

濃い瘴気などが霧を形成していて視界が少しだけ悪い。

周りを見回すと、昼間だというのに薄暗くてどんよりとした雰囲気が漂っていて、私は少しだけ身震いした。

「……」

私がいつも使っている筈がない今は、魔力で体を強化すれば飛んで進むよりも走った方が早いだろう。でも、正直なところを言えばこの薄暗くて氣味の悪い森の中なんて歩きたくはない。

それに私の世界とこつちの世界では地形なども変わっている可能性が極めて高い。慣れない土地で、さらに森の奥を歩くのはあまりよろしいとは言えないだろう。もしかしたら死ぬ可能性のある異変の最中は特にだ。

私はそう判断して魔力で飛行をするための上への推進力を体に働かせると、私の体が浮き上がり始めて少しずつ高度を上げていく。

「…行くか」

木の葉っぱの高さ以上の高度を維持しながら私はまた独り言をつぶやきながら、とりあえず前に向かつて進みだす。

名前も教えてくれなかつた“彼”はこの異変は大したことはない。君でも解決できることはできると思うと言つていたが、実際のところは不安しかなく、さつきから緊張しつぱなしである。

しかし、緊張してガチガチになつているとは言え、たいしたことはないという“彼”的言葉を少しばかり鵜?みにしそぎていたらしく、敵の接近に気が付くことができなかつた。少し考えてみればすぐにわかることだろう。上空から魔力を放出しながら落ちてきた人間がいれば嫌でも目に入る。

ヒュウッと突風にしては弱く、短い風が吹いて私の髪の毛を強くなびかせ、被つている白と黒の帽子も飛ばされそうになり、私はあわてて帽子を手で押さえた。

あまりにも不自然な突風が気になり、私が周りを見ようとしたときに何かを打ち付けられたような衝撃を後頭部に受け、顔がガクンと前に傾く。

「……ん？」

私はすいぶんと間抜けな声を出しながら、小突かれた後頭部に手を伸ばそうとした。殴られた部分に手が触れそうになつた直前、殴られた痛みが遅れて私の後頭部から額までを激痛が掛け巡る。

「あぐ…………!?」

後頭部に向かつっていた手で頭を抱え込むように押さえて痛みを引かせようとするが、効果などあるわけがなく、頭が割れそくなくらいの激痛が頭の中を反響していく、すでに私は激痛の情報で脳がいつぱいいつぱいになつて失神しそうになつていた。

そのとき察しが悪く、ほのぼのと平和に暮らしていて、数少ない異変に出向いた時でも感じたことのないはつきりとしていて、とても強い殺氣を感じた。

ズキズキと痛む頭では一定量の魔力を体の浮遊に回すことにすら気が回らず、浮遊に回していた魔力が途切れたことであるでつるされているロープがいきなり絶たれたかのように、私の体が地面に向けて落下を開始する。

すぐ真下にあり、密度が高く生い茂つている木の葉っぱと、枝分かれをしまくつた木の枝が張り巡らされている場所に私は突っ込んだ。

バキバキと細い木の枝をへし折りながら体は進み、葉っぱで光を遮られている薄暗い森の中に私は逆戻りしてしまう。

ガサガサと木の葉と体が擦れてやかましい音を出し、その音で何も聞こえない状況になつていて私に追い打ちをかけるようにして、ひときわ太い木の枝に何の受け身もとらずに突っ込んでしまつた。腹部に全体重がかかり、鈍い痛みがじんわりと腹部を襲う。

「は……ぐつ…………!?」

それのせいで私の体のバランスが余計に崩れ、数メートル下の地面に顔から突っ込む態勢で落ちるが、両手を顔の前に突き出していたおかげで顔面から地面に突っ込むことはなかつた。だが、強化していない私の細くて華奢な腕では自分の体重を支えることができず前に前のめりになり、前転をするようにしてゴロンと体が回転し、背中を地面に打ち付けてようやく私の体は動くのをやめた。

痛みで物事を考える余裕はないが、本能的に私は倒れた状態から起き上がり、ふらふらとおぼつかない足取りで亀のような鈍さで逃げ始めた。

背中をぶつけた程度の痛みでは、後頭部を殴られたさいの激痛は紛らわせることはできないらしく、強烈な痛みが私を常に襲つている。

「…………つ」

首筋に何か液体のようなものが垂れてくる感触がして、私は後頭部に手を伸ばして

さつき殴られた位置に軽く触ると、本当はかなり痛いはずだが感覚が麻痺してあまり強い痛みを感じない。しかし、触った髪の毛や頭皮がなぜか濡れているようで、後頭部から放した自分の手のひらを見た時、私は小さく悲鳴を上げてしまつた。

「ひっ…！」

一度にこんなにたくさんの血を流したことがなく、手のひら全体にべつたりとこびりついている血が自分の物だとは信じがたく、未だに実感がない。

しかし、この後頭部の痛みは本物であり、血を流しすぎて貧血気味になつてゐるため、これ以上の血を流させないように私は魔力を集中的に後頭部の傷に送り込み、できるだけ早く傷が治るようにした。

あまり痛みで頭が働かないが攻撃されたのは間違いないわけであり、一刻も早く移動しようとしているが、私が地面に落ちた場所から十メートルも移動しないうちに、私は飛んでいた時にも向けられた強い殺氣を本能が感じ取り、恐怖で体が硬直して私のいう事を聞いてくれなくなる。

それはよく表現される蛇に睨まれた蛙と言うやつだ。

「魔理沙ああああああああああああああ…！」

女の子のような高い声で叫びながら私の名前を叫び、誰かわからないが子供のように小さい子が左横方向から鋭い剣のようなものを掲げてヨロヨロとしている私に襲い掛

かつて來た。

東方異戦線 第四話 剣士

「うわあああああっ!!」

私は情けない悲鳴を上げながら逃げ出そうとしたが、殺氣にビビッて硬直した体を動かすのは至難の業で、左方向から襲い掛かつて来た子供の反対方向に一步だけしか逃げることができず、その子供に私はすぐにおつかれてしまう。

考えもなしに右方向に背を向けて逃げた私は、せめて左方向を見ながら逃げればよかつたと今更思う。襲い掛かつてきている人物に背中を見せるなんて、襲つてくださいと言っているようなものだ。

「死ね!!」

薄暗い森の中でも、持つている武器で切り付けることができるほどの至近距離であれば、さすがにその人物の姿も確認できる。

水色の綺麗な髪に、髪の毛と同じ色彩の瞳、自分の色を強調するかのような水色の服に背中の肩甲骨の辺りに左右に三つずつ浮いている合計六つのひし形の宝石に似た物、そこまで見れば私を襲つてきている人物はすぐに思い当たる。

「…チルノ…!?

私が呟いた時、チルノが空気中の水分を魔力で凍結させて作り出したのか、能力で何もない場所から作り出したのかはわからないが氷を生成し、私の服や皮膚なら簡単に切り裂くことができるぐらいには切れ味のありそうな剣に加工して切り付けてきた。

チルノに背を向けていた体を半回転させてチルノの方を向き、切られそうになつていた顔をガードするように前腕を前に突き出すと、手首寄りの部分を氷の刃で切り裂かれてしまう。しかし、私の歩幅と四分の三程度の身長もないチルノの歩幅は十センチ以上の差があり、何とか離れられた分だけ軽傷で済んだ。

氷で作られた刃はとても冷たくてひんやりしており、結晶の見た目通りのツルツルとした質感である。

「いっつ……!!」

チルノに切られた部分から血が流れ出し、ポタポタと赤い水滴が地面に垂れてシミとなつていく。

傷口を右手でしつかりと押さえて止血しながらチルノから距離を置き、魔力での傷の再生を促進させる。

だが、チルノも回復はさせる気はないらしく、魔力を背中からわずかに放出して加速をしながら私に向かつて飛んできた。

そう何度も何度も攻撃を許せばこつちのみが持たない。チルノがこつちに到達する前に私は短い詠唱を早口で唱え、魔力で自分に加速の加護をつけて後方に飛びのいた。チルノの簡易的な加速では私の超加速に追いつけないらしく、チルノの進んだ距離の二倍以上の距離を同じ時間で進み、私はこつちに来ようとしているチルノに向けてレーザーを放ちたいが、どこを撃つか迷う。私がいる世界といろいろと違う部分があると困る。万が一チルノを殺してしまい。仇討ちなんてされたら洒落にならない。

ここはチルノを殺すのではなく。行動不能にさせてそのうちに行きたいところだ。

足を撃つてもチルノは基本的に空を飛んで移動するため、足への攻撃はあまり意味をなさない。ならば空を飛ぶために微妙な魔力調節を行っている、あの六つの結晶の羽を撃ちぬくこととした。

手先に魔力を集中し、一直線に突っ込んできているチルノに向けてレーザーをぶつ放す。

ソフトボールぐらいの太さのレーザーがチルノに向けて直進し、肩の上からわずかに見えていた氷の結晶のようなものを撃ちぬく。

と思った矢先、チルノは体全体を回転させて地面に背中を向けるようにして空を飛び、自分がいる位置を上昇させて私のレーザーをかわした。

魔力を放出することできらに加速して私に向けて先端が鋭くとがっている氷の弾を

散弾銃の散弾のように飛ばしてくる。

レーザーを撃つために手に送っていた魔力を無理やりカットしてレーザーを消し、横に飛びのくと氷の弾丸は服を掠りはした物の、私の体を貫いたものはなく。そのまま直進して地面に焼き突き刺さつた。

まるでクナイが壁に刺さつたかのような音と共に、十五センチほどの氷の弾丸が三分の二ほどまで地面や木の幹にめり込んでいる。

「……なんつう……威力だ……！」

これが自分に刺さつていたと思うと背筋が凍る。

改めて認識の低さに私は自分自身のことを罵りたくなつた。私が自分の世界にいたころ、弾幕勝負でも異変で戦つっていても感じたことのなかつた殺気をこいつは感じさせたのだ。だから、私がいた世界と同じ感覚で戦つていれば、私は妖精にすら殺される。

「……つ…………くそ…………！」

体を魔力で強化し、チルノから逃げようと全力で走り出した。

逃げることができなくとも、とにかく仕切りなおさなければならない。このままの流れで戦えばいずれチルノに殺されれる。

長距離を移動してチルノの仲間に出てくるだけは避けたいが、そんなことは言つていられない。

背中から魔力を放出して簡易的な加速を使い。チルノから一気に距離を引き離す。

何かマジックアイテムを使いたいところではあるが、今日は弾幕勝負をする予定なんかはなかつたから、道具なんて都合のいいものは持つてきていない。

「魔理沙!!逃げんなちきしょーー!!待ちやがれー!!」

チルノが結晶の羽で魔力を調節してこちらに向かつて加速しながら飛んでくるが、魔法を唱えてさらに加速する私には追い付くことはできないらしい。

「お前はナイフを持つている相手に襲われて、襲ってきた相手が待てつて言つたら待つのか馬鹿野郎!!」

私は叫んでから走ることに専念しようとしたが、チルノから発せられているわかりやすい殺氣ではなく、鋭くて細い線のような感じ取ること自体が奇跡的と言える殺気を何とか感知した。

「っ!!」

スライディングをするようにして自分の頭の位置を低くすると、私が走っていた時に両サイドに生えていた木があり、その木の幹の私の首とちょうど同じ高さの位置に、何かに切り付けられたような切れ込みが入ったと思つた直後、直径が四十センチ以上はある木の幹が木片をまき散らしながら一刀両断された。

「…なあ…!?」

ドオオオン

と地面に倒れた木が地震のように地面を衝撃で揺らす。

振動や木の枝と葉っぱに影響を受けて足をもつれさせながらも、今も周りを冷却しながら私を追つてきているチルノから逃げ出そうとした。

「…つくそ……いつたい誰が!?」

チルノが私に攻撃してくるとということは妖精が異変になんかしらの形で関与しているのは間違いないだろう。

しかし、木の幹をやすやすと両断するような妖精は普通いるか?こつちでは知らないが、私がいた世界では木の幹を切断するような妖精はいなかつた。この世界の妖精はこんなに強いのかと戦慄しながら走り出していると、たくさん生えていて視線の行き届かない木の陰から私を攻撃するために、ある人物が顔をのぞかせた。

その人物の顔を見て木の幹をどうやって両断したのかを納得した。

「今更驚くことがあるかしら? 私に切れない物はあんまりないのはあなたも知っていることでしょう?」

東方異戦線 第五話 救世主

「一つ!?

妖夢の囁くような小さな声が耳元で聞こえ、走つて逃げようとしていた私の首元に後ろから伸びてきている楼観剣が添えられていて、なんとか踏みとどまつた。

「…魔理沙、大人しくしてもらうわよ」

私の予想は大外れだつたらしい。妖精が起こした異変ならば妖夢は出てこないだろう。妖夢が何かしらの事情で参加している可能性もある。もしかしたら、妖夢達が異変を起こして妖精たちが従つているという可能性も捨てきれないが、今はそんなことはどうでもいい。

「…くそ……次から次へと…なんだつてんだ……!」

私が小さな声で毒づいていると、真後ろに立つている妖夢は無言で私の足を蹴り飛ばしてきた。

妖夢の華奢な見た目からは想像もつかないほどの威力で足を蹴られた私の体は、空中で一回転して地面に背中から落ちてしまい。妖夢に無防備な姿をさらしてしまう。

「うぐつ!?

たつた三十センチ程度の高さでも、受け身を取れなかつたおかげで思つていた以上の鈍い痛みを背中に感じる。

衝撃でほんのわずかな時間だけ肺が変形し、肺の中にあつた空気が肺から押し出され
て口から漏れ出た。

「魔理沙、これであなたは終わり……調子が悪かつたのか知らないけど、さようなら」
起き上がりうとした私の首に妖夢は正面から楼観剣を添え、淡々と冷たく言い放つと
持つっていた得物をまるで、武士が切腹者を介錯をするように持ち上げる。
「つ……ちよつ……まつ……!?」

自分の身の危険を感じた私はとつさに手を上げてガードしようとするが、木の幹すら
簡単に切断するほどまでに切るという行為に特化している楼観剣にとつて、私の細い腕
など紙同然だろう。

怖い。怖すぎて言葉も出なかつた。生まれてこのかた向けられたことのない殺気に、
私は圧倒されていたのだ。

自分の切られる瞬間なんか見たくもない。私が目を閉じようとしたとき、妖夢が私の
首に向けて楼観剣を振り下ろす。

「妖夢、私の友人をどうするつもりかしら？」
パキイイイイツ!!

金属の何かがぶつかったような甲高い音が無駄に大きく響き、妖夢は舌打ちをしながらステップを踏むようにして私たちから数メートルの距離を取る。

赤色と白色の巫女服がふわりと私の前ではためき、魔力の塵をまき散らさせながら私を切り裂くはずだった楼観剣を彼女は弾き飛ばさせた。

赤と白の巫女服を着た女性の博麗靈夢は間一髪で私を助けてくれた。

妖夢の楼観剣は折れたわけではない。だが、妖夢の手には靈夢に殴られたことで強い衝撃を貰つたらしく、ビリビリと痺れている手を握つたり開いたりし始めた。

「…私たちは敵、それ以上でもそれ以下でもないでしよう?…どうせ話なんかお互いに通じないんだから、最終的には穩便では終わるはずがない…だから戦つたのだけれど、何か悪いの?」

妖夢は楼観剣の刃が欠けたり曲がつたりしていないか、刀が歪んではないかを確認して痺れの治まつた手で楼観剣を握り直す。

「…そうね。…それより魔理沙。あんたがこの二人に後れを取るなんて想像もつかないんだけど、大丈夫かしら?」

妖夢が楼観剣の柄をギュッと握り直し、何度も見たことのある剣道の基本的な構えに似た型で構えをした妖夢は戦闘体制に移行した。

「……ああ……」

体に存在している痛みと自分が生存していることを確認し、多少痛みを感じはするが騒ぐほどの痛みでもないため、私は靈夢に短く返答を返す。

「…そう、無事ならよかつたわ」

靈夢が安心したように肩からわずかに力を抜き、そのうちに妖夢とこちらにふわふわと遅れて浮きながら飛んできたチルノが合流する。

「妖夢!!」一人で靈夢を倒そう!さいきょーのアタイがいれば靈夢なんてちよちよいのちよいだよ!!」

そのどこから來るのかわからない自信で余裕そうな笑みを浮かべてチルノが言い。右手の平を上に向けて勢い良く振り上げ、手のひらの上に氷の剣を形成させた。

「…っ」

私は目を見張った。こっちの世界にいるチルノと私のいた世界にいたチルノとではスケールも質も違すぎるのだ。

チルノの周りや私たちの場所まで急激に気温が下がり、私たちの吐く息が白くなつていく。

体内の温度と外気温の差が高くなり、周りの温度が低いため吐いた息に含まれる水蒸気が空気中の塵や埃に付着して水滴となり、吐いた息が白く見える。

森の中ではさつきまでの攻防で木が折れ、そこから遮られていた日の光が入ってきてわずかに温度が上がったというのに、意外と涼しかった周りの温度が摂氏〇度かそれ以下にまで下がっていき、あまりの寒さに耐えきれずに私は魔力で体を覆つて寒さから身を守つた。

バキキキキッ!!

自分の身長の倍以上にもなる大きさの巨大な氷の大剣をチルノは簡単に作り出す。無駄な装飾品などは一切作られておらず、かなりシンプルなつくりである。

その剣は切るというよりは、叩き潰して力任せに対象をぶつた切るといった用途なのだろう。刃の鋭さはあまりないように見えた。

私がいた世界よりもこっちのチルノはかなり強い。頭の方は置いておいて、もしかしたら、紅魔館の居眠り門番とどつこいどつこいになるぐらい強いかもしねれない。

「…食らええええええつ!! 瞳夢うううう!!」

ぶん回して周りの木を叩き折り、チルノが真上から瞳夢に向けて氷の大剣を振り下ろした。

「チルノ！待つて!!」

妖夢がかなり焦った様子で、瞳夢にその大剣で斬りかかっていくチルノの攻撃をやめさせようと手を伸ばす。

だが、妖夢は靈夢に近づいていたチルノの肩に触ることができなかつたらしく、伸ばしていた手が何かに触れることなく握りしめられ、少し悔しそうな顔をした妖夢はそれと同時に後ろに引き去る。

靈夢がこちらに向けていた優しい瞳の色が変わり、攻撃対象でない私が寒氣するような攻撃的な瞳をチルノの方向に向けた。

「…ふふつ…」

靈夢はわずかに口角を上げて薄く笑い。チルノの攻撃に備えてお祓い棒を構えた。

ドガッ!!

大砲でもぶつ放したような大音量と共に、私の目に映し出されたのは内部から爆発したように見えるチルノの大剣だつた。

剣を形成している氷の結晶が大小さまざま大きな大きさで散らばり、空気中でキラキラと光り、この光景は非常にきれいだ。

それよりも、驚いたのは靈夢がチルノの大剣を叩き壊したのは、スペルカードなどの小賢しい手を使つたわけではなく。魔力で強化された自らの純粹な力だけでチルノの得物を破壊したのだ。

四方八方に散らばつていく氷の結晶をかき分けながら、靈夢が突然持つていた武器が無くなつたチルノの胸倉に左手で掴みかかつた。

「いぎつ!?」

靈夢の引き寄せる力がだいぶ強かつたのか、チルノが小さく悲鳴を上げた。その後、靈夢が掴んだチルノのことを勢いよく地面に投げ技で叩きつけた。

「……がはっ…!」
 チルノが投げ技で地面にぶつかると、チルノのいる位置が一〇センチほど狭い範囲で地面が陥没し、その周りが地割れのように割れながら岩石などがわずかに浮き上がつてくる。

その時点では既にチルノは虫の息となつており、肺に折れた肋骨や碎けた背骨が突き刺さつてしまつたのか、ものすごい量の血を口から吐き出して失神している。

びくびくと手足を痙攣させ、白目をむいて氣絶しているチルノを掴んだまま、右手に持つてお祓い棒でチルノを殴るためにお祓い棒を振りあげた。

「靈夢！まつ……！」

殴ろうとした靈夢に手を伸ばして待つてと叫ぼうとしたとき、靈夢は無視したのか私の言葉が遅かつたのか、またはその両方かもしれないが靈夢はチルノの胸にお祓い棒を振り下ろす。

肉を碎くというよりも、肉を潰すという表現の方が近いだろう。それと同時に大量に並べられた骨を一気に叩き割ったような身の毛がよだつような音が聞こえてきた時、私

はその光景を見ていなければよかつたと後悔した。

東方異戦線 第六話 疑い

靈夢がお祓い棒を問答無用で振り下ろし、それに当たったチルノの胸が大きくへこみ、殴られた力に耐え切れなくなつた彼女の肉体がまるで体内に爆弾でも仕掛けられたいたのかと思うほどに、派手に爆発した。

ビシャツ!!

はじけ飛んできた血が勢いよく私の額や頬など、体中に飛び散つて白いエプロンや帽子を目で見てわかるほどに赤く染めていく。

「……へ……？」

初めのうちは私は何が起こっているのか、全く理解できなかつた。気が付くと上半身がはじけたチルノの死体が靈夢の足元に横たわり、その死体を中心に木や雑草などの草木、地面、その場にいる人間にチルノの血がこびりついていた。

靈夢が時折痙攣して、動物のような意志を持つた動きの無くなつたチルノの死体からようやく手を放す。

「……くつ……」

妖夢は立ち位置や戦力の差から、自分が置かれている状況があまり好ましいと言える

状況ではないと即座に判断し、鞘に樓觀劍を収めながら後方に飛びのき、そのまま走り去っていく。

「…」

靈夢は無言で妖夢が完璧にこの周辺から走り去るのを待ち、顔のあたりを巫女服の袖で拭う。

「…」

私は自分の手に目を落とすと、生暖かくて皮膚が一部着いたままの五センチ程度の肉片が手のひらにへばりついているのが見えた。

それはチルノの体の一部であるのだと、血と脂でしつとりとしていて、ときどきびくりと筋肉が硬直することで起こる痙攣からわかり、理解することを拒否していた脳がその皮膚片の端にある、裂け目。いわゆる目を見たことでようやく私は自分が持っている物を察した。

見開かれ、白目をむいてはいるが瞳の一部が瞼に隠れておらず、その鮮やかな水色の瞳と目が合つた。

今までこんな異常な状況に置かれたことのなかつた私にはショックが大きすぎ、失神させるのには十分すぎる物だった。

体に力が入らなくなり、チルノの血で汚れている地面に私は受け身を取ることができ

ずに倒れ込んでしまう。

「……は……う……あ……」

意味など持たないただ単に口から洩れた言葉が薄つすらと耳に届き、熱を地面に取られて触るとひんやりと冷たい血だまりを作っている血が、私が体を投げ出して倒れたことで大きな波紋を作る。

「魔理沙!?」

血で巫女服や顔、お祓い棒を持つ手などを真っ赤に染めている靈夢が驚いた顔をして私に走り寄ってくるが、私は靈夢に抱き起されるまで意識を保っていることができず、意識を失つてしまつた。

誰かが叫んだ。その叫び声は周りに何も見えないこの空間に不自然に響き渡る。

「止めて！殺さないで!!」

恐怖に染まつてゐる彼女の瞳からは、助けてだつたり、見逃してくれという懇願が見て取れる。

しかし、彼女を掴んでゐる靈夢は彼女の懇願など聞こえてはいないようだ。チルノが私の方向を向き、助けてと叫んだ。

私は靈夢に掴まれてゐるチルノに向けて手を伸ばして何かを叫ぶが、彼女の表情は恐怖に歪んだまま私にまた何かを叫ぼうとした。

靈夢は彼女にそれをさせずにお祓い棒を振り下ろす。まるで、豆腐でも殴ったようにチルノの体がはじけ飛び血肉が周りにまき散らされる。

胸を殴られたことでチルノの頭が首から千切れ弧を描いて宙を舞う。

と私の胸に向かつて飛んできたチルノの生首が胸に当たり、反射的にキヤツチするよう手を出してしまった私の手に重力に従つて落ちてきた彼女の頭を取つてしまふ。

キヤツチしたチルノの顔がこちらを向き、触れた感触は触れたこともないというのに、サラサラな髪の毛の感覚や、首から出てきて私の手を濡らす血の感覚まで感じることができた。

そして、目が合った生気がなく、濁つたチルノの両目はあの肉片についていた瞳と同じで私を見ていた。

夢の中で叫んだのか、現実の私が叫んだのかはわからない。だが、この地獄のようないいからは現実に引き戻されたようだつた。

[...]

現実に引き戻された私は全身にぐつしよりと汗をかいていて、息も大きく乱れた状態で目が覚める。

悪夢ではよくあるような夢だ。でも、自分が本当にこんな夢を見るとは思わなかつた。

「……はあ……はあ…」

妙にリアルで感触まで感じることができていたが、寝ている布団から手を出して眺めると、夢で見たような血はついておらず、失神する前までこびりついていたはずの血なども綺麗にふき取られている。

こつちの世界では私と靈夢の仲が良いのかはわからないが、異変が起きている最中に助けてくれたということは、決して仲が悪いというわけでもなく、敵対はしていないという判断ができる。

そう思いながら私は自分の手のひらに合わせていた焦点を、指の隙間から見える天井に移すと、天井は古い木などではなく作りが洋風で博麗神社ではないことが伺える。

私は悪夢の影響で乱れた呼吸をやつと整えることができ、気分が落ち着き始めたころにすぐ横から視線を感じ、首を傾けて見られている感覚のする方向を見た。

「すごい声だつたけど…大丈夫?」

少し心配そうな表情を向けた靈夢が私の顔を覗き込んでいる。夢の中ではなく、現実でも叫んでいたらしい。

「…靈夢…」

靈夢を見て、実際のところは怖かつた。チルノをあんなやり方で殺すなんてと、でも、それ以上にとても安心した。こっちのチルノの戦闘力はわからないが、妖夢を戦わずに撃退するぐらいには強く、私を覗き込む彼女の表情はとても優しそうだ。

「大丈夫そうで何よりよ、魔理沙……あなたが妖夢とチルノに後れを取るなんて、珍しいこともあるのもなのね」

靈夢はいきなり核心に触れるような内容を放し始めてくる。

「……ああ、そのことなんだが……」

下手をしたらこの会話だけで、靈夢に異世界の住人だとバレてしまう可能性だつてある。でも、靈夢は味方なわけであるから、本当のことは話していいのではないか?という提案を思い浮かぶが、私はすぐに自分自身で否定した。

さつきのチルノと靈夢の戦闘から、この異変は死人が出るレベルのやばい異変だ。疑われれば即座に殺されかねない可能性がる。正直に話すのはもう少し後の方が多いかも知れない。

「…どうしたの?」

少し考え込んだ私に大丈夫?といいたげな靈夢がずいっと体を寄せてくる。

「いや……チルノに頭を殴られたせいなのかわからないんだが……記憶が一部ない気がするんだ……」

私がそう呟いて靈夢が怪訝そうな顔をしたとき、この部屋で唯一廊下につながつてゐるドアが開かれ、少し青色に近い紫色っぽい髪の毛の色と、その髪の毛の色に近い瞳を持ち、靈夢と同じぐらい整つた顔立ちをしているメイド姿の咲夜が部屋の中に入つてきた。

少しだけ私を見た後、ゆっくりと口を開いて話し始める。

「捉えようによつては随分と都合のいい記憶喪失ですね。魔理沙」

表情や言い回し、咲夜の目つきからかなり色濃い警戒心と不信感を抱いているのが勘の悪い私でもわかり、疑いの眼差しを向けられた。

「ま…まあ、確かに人の名前は覚えているに…今までのことを覚えていないとは、取りようによつては確かに都合がよすぎる。…それでもこうしてそんな状態になつてるんだ…そのところは考えておいてくれ」

多少不信感を持たれるのは仕方のないことだが、それでも無理を押し切つてそう言うことにしなければ、記憶がある前提だとどこかでボロを出しそうだ。

「…百歩譲つて何かしらのショックを頭部に与えられたことで記憶障害が引き起こされてしまつたとしましよう。…そうだとしても、あなたが本物の魔理沙でない可能性は捨てきれません」

鋭い目つきで腕を組んだまま、咲夜はいいながら私のことを威圧し続ける。

「た…確かに……」

もともとあまり頭が回る方でもないため、咲夜の言葉が正論に感じて何も言い返せなくなってしまう。

それに加えて現在、この世界にいる私は、この世界にいた魔理沙と自分は同一人物だと証明できる記憶や物などを持ち合わせてはいない。

絶体絶命である。

うまく言い返すことができず、ダラダラと冷や汗を流している私に、咲夜からの疑いの眼差しがさらに強くなる。

「……」

私に向けて目を細める咲夜に対し、靈夢は私と咲夜の話を黙つて聞いていたが、咲夜が何かを放そうとしたときに彼女はゆっくりと動き出した。

こちらに手のひらを向け、ゆっくりと腕を伸ばしてくる。私を捕まえる気なのだろうか。そう思つて逃げ出したくなるが、逃げようにもさつきのチルノのことがあつたせいで、私もああやつて殺されるかもしれないと考えると、体が動かなくなつてしまふ。

首からもしくは胸倉を掴まれると思つた私はビクツと肩を震わせるが、靈夢はもつと下の位置にある。この世界の私に似せるために大きくなつた胸を驚掴みにした。

「うひやあつ!!」

今度は別の意味で肩を震わせて、胸を触られている羞恥心で顔が熱くなつていくのがわかるが、そんな私の状況などは関係なく。靈夢は私の胸を二度も三度もニギニギと触り、ふむつとうなづいてから言う。

「魔理沙で間違いないわ。この柔らかくてどんな形にも変わりそうな質感、手に収まるか収まらないかのちようどいい大きさ、見た目のわりに重すぎず軽すぎない重量：いつも触つてから間違いないわ！」

どんな確認方法だよつ！と叫びたかったが、あまりの衝撃に舌が喉にへばりついた様に動かなかつたため、言えなかつた。

「靈夢がそう言うなら間違いはないんでしょうが、誰かが化けている可能性はないんですか？」

そんな放心している私を置いて、咲夜は私をじろつと睨みながら靈夢に話しかける。だが、靈夢はその咲夜の意見を否定する。

「いや、無いわね…完璧に姿を真似ることができていても、質感なんかはここまで精巧にまねはできないと思うわ。集中すればできないことはないかもしだれなきけど、これだけ長い時間ずっと最高レベルで姿を変えるのは無理よ。それに、今やつたみたいに不意打ちみたいな感じなら特に質感なんかは変えられないと思うわ」

靈夢がそう言うと、咲夜はとりあえずは私が本物と認めたらしく、うなづいて私に向

けていた疑いの眼差しをやめた。

東方異戦線 第七話 奇襲

咲夜がベットに横たわっている私から目を離し靈夢に尋ねた。

「それで、魔理沙に何があつたんですか？ 灵夢」

「…さあね、私もなんだかわからないのよね…魔理沙が妖夢とチルノの二人を相手にして戦つてたけど、どうも様子がおかしくてね…血まみれだつた魔理沙の体をさつき拭いていたら後頭部にも結構多い量の血がついてたから、頭を殴られたことは確実なのよね」

靈夢が胸を掴むためではなく、私の後頭部の今はない傷があつた場所を優しく撫でながら咲夜に言つた。

「…そうですか…わかりました。とりあえず対策は明日練るとして、今日はできるだけ安静にしていましょう」

「そうね、魔理沙も怪我とかして疲れてそuddash;だし」

靈夢が私を見てから咲夜に視線を戻してうなづく。

「それと魔理沙と靈夢、食事はどうします？」

ドアを開けて外に出ようとしていた咲夜が、思い出したようにこちらを振り返つて私

たちに言つた。

「…すまないが…私はいらないぜ…食欲がないんだ」

「私もいらないわ、さつき少しだけ食べちゃつたからお腹はすいてないわ」
靈夢と私が外の暗い景色的に夕食を断ると、わかりました。とだけ言ってすぐに部屋を出て行こうとしたが、ドアを開けて外に出たところで振り返り、咲夜はこちらを向いて少し呆れたような表情を見せながら言う。

「靈夢…魔理沙は一応は病み上がりですので、ほどほどにしておいてあげてくださいよ」「え?…どういうことだ?」

私が聞き返すが咲夜は答えずにドアを閉めて廊下を歩いて行つてしまふ。

「なあ、靈夢…咲夜が言つてたのはどういう事なんだ?」

私が聞くが、靈夢は答えずに私に質問をしてくる。

「それよりも魔理沙、頭とかの傷は大丈夫なのかしら?」

「…え?…ああ、…まあ大丈夫だ…だいたい全快したぜ」

頭痛もないし、体を動かして何か痛みがあるわけでもない。上体を起こした私はグルグルと腕を回しながら靈夢に言うと、彼女は口角を少しだけ上げて笑う。

「靈夢?」

首をかしげている私の首に靈夢が腕を回し、顔をぐつと寄せてくる。

「ねえ、魔理沙」

ほんの少し顔を前に傾けるだけで唇が触れてしまうぐらいの至近距離にいる靈夢が、私に静かに囁いた。

「へ……な……なんでございましょうか？」

顔を赤らめて様子のおかしい靈夢に抱きしめられて離れることのできない私は、敬語になりつつも答えると、彼女はさらに私に顔を近づけてくる。

「れ……靈夢……！」

「魔理沙は今……記憶がないんでしょう？」

靈夢が頬の色を朱色にわずかに変え、色っぽい顔が視界いっぱいに広がり、私の心臓の鼓動の感覚が急激に狭くなっていく。

「……た……確かに……そ……うだ……が……」

「いつもみたいにしてみたら、脳の中の何かを刺激して……もしかしたら記憶が戻るかもしないわ」

靈夢の言わんとしていることを、私は何となく察する。

確かに、私は靈夢のことがライク的な意味ではなく。ラブ的な意味で好きだ。でも、目の前にいる靈夢は私が好きな靈夢ではない。だから、大人の階段を上るようなことは私が知っている靈夢としたいわけだ。だがそんな私の願いも届かず、彼女は私の唇に自

らの唇をほんの少しだけくつつけた。

上半身を起こした私の太ももの上に座つていて、すでに出来上がっている靈夢の吐息が私の唇を撫で、気分が高揚していくのがわかる。

「靈夢……ちよつと……ま……」

私はなんとか自分の理性に言い聞かせ、抱きしめようとしている靈夢の腕を外させようとした。しかし、靈夢の方が一步早く、私に体重を傾けて押し倒しながら私の唇に自分の唇を押し当ててきた。

「んぐ……」

マシユマロのように柔らかくてぷっくりと膨らんでいる靈夢の唇は、触れるとしつとりと濡れていて、私の中から理性などを吹っ飛ばしてしまう威力がある。

何もできずに体を硬直させていたる私の唇の隙間に、靈夢はさかさず舌を滑り込ませてきた。

自慢ではないが、生まれてから恋愛などしたことがない。そうなれば当然キスなどもしたことがないということになる。そんな私には彼女のキスは刺激が強すぎるわけで、残り少なくなつていた理性ではこの気持ちいいという初めての感覚にあらがうというができなかつた。

靈夢は唾液で濡れた舌で私の口の中をかき混ぜても、なんだか体に力が入らずに

ぐつたりとしてしまつてされるがままとなつてしまふ。

快樂が脳の許容量を超えたのか、何も考えることのできない私は次から次へと湯水のようになつてくる快樂を貪る。

五分ほどそうしていたのだろうか。時計がこの部屋にはないため時間は定かではないが、靈夢がようやく私から口を放した。

お互いの混ざり合つた唾液が離れた私と靈夢の唇を線でつなぎ、次第に細くなつてゆく線はあるときにぶつつりと切れて無くなつてしまふ。

「魔理沙……」

靈夢が興奮することによつて血圧が上がり、彼女の白い肌が顔だけではなくほつそりとしたうなじのあたりまで少し赤らんでいる。

初めてのことはどうしたらいのかわからず、キスをしていた間息をほとんど止めていたに等しかつた私は、何百メートルも全力でダツシユしたかのように息を切らいでいるせいで、靈夢に声をかけられても答える余裕がなかつた。

「……もつとしましよう……もつと、いつぱい……」

大人っぽくて官能的な声で靈夢が私の耳元でささやくと、脳が麻痺でもしたかのように痺れて何も考えることができなくなつてしまう。

靈夢が私の服に手をかけ、とても丁寧に來ている魔女の服を脱がした。

痺れる脳でも羞恥心をわずかに感じ、胸元や股間の周りを手や布団などを使って隠そうとしたが、服を脱いで裸になつた靈夢が私の腰の上に乗り、片手では隠し切れない私の大きな胸に片手を伸ばして優しく触れる。

「魔理沙…へこたれるのはまだ早いわよ…夜はまだ始まつたばかりなんだから…」

靈夢はそう言いながら私の下半身に手を伸ばし、自分の上体を前に傾けて私に顔を近づけてくる。

靈夢はさつきよりも激しく、私に濃厚なキスをした。

「……あの、うるさいんですけど」

朝、腰が抜けて歩けなくなつた私を、靈夢が結局記憶が戻らなかつたと残念がりながらもおぶつて食堂に連れて行つてくれた時、咲夜が目の下に薄く隈を作つた状態で、呆れた顔つきで私と靈夢に言い放つ。

「うるさいわね…仕方ないじゃない」

靈夢は小さくため息をついて咳き、席に着きながら咲夜に言つた。

「何がしかたないっていうんですか？…私は靈夢に言いましたよね？ほどほどにしておけと」

まるでやくざの様な目つきで靈夢となぜか私を睨みながら、二人分の朝食を椅子に

座っている私たちの前に出して言う。

「仕方ないじやない……いつつも凛としてて余裕を醸し出してたのに、昨日は初々しいし……ずっとビクビク震えてて可愛かつたんだもの……テンション上がつちやうでしょ！」

「ぶふつ!?」

靈夢がいきなりそんなことを口走り始め、咲夜が出してくれた朝食を口に運んで咀嚼していた私は、食べ物をのどに詰まらせて咳き込んでしまう。

そんな私の背中をすぐ隣に座っている靈夢がさすってくれる。

「いや……知らないですよ」

少し顔を赤面させた咲夜が言いながら私が咳き込んで汚してしまった机の上を、持ってきたタオルで拭いていく。

「まあ、いいです……それで、今日はどう動く予定なんですか？靈夢」

咲夜が私の背中をさすつている靈夢に話しかけた。

「そうねえ、魔理沙は今の現状を理解していないから、まずはそこから説明しないといけないわね：面倒くさいけど」

咳がようやく止まつた私から手を放した靈夢が、咲夜が出した朝食のみそ汁に手を伸ばし、一口啜る。

「…最後の一言は余計だぜ、靈夢」

私は温かいお茶を持ち上げながら言つて熱いお茶を一口飲んで、お茶の熱が私の口の中に熱を伝えていく心地よい感覚を楽しんでから飲み込み、湯飲み椀を机に置いた。

「…とりあえず、朝食だけでも食べちゃいましょうか。…現状の説明はそれからにします」

「…わかつたぜ、それと咲夜聞きたいことがあるんだが」

私が食べ終わつた野菜などが入つていた皿を片付ける咲夜にとあることが聞きたくて、部屋から出て行つてしまふ前に話しかけた。

「ん…？なんですか？」

「トイレってどこだっけ？用を足したいんだけど…紅魔館つて広くて場所がわからないんだよな」

私が言うと、咲夜は皿を持つたまま廊下に私と一緒に出て、トイレへの行き方を説明してくれる。

「トイレはこの廊下を突き当りままでまつすぐ行つてから、右に曲がつてまつすぐに行つた突き当りにありますよ」

咲夜が指を出す方向に顔を向けると、三十メートル程度先で壁に視界を遮られて見えないが、行けばわかるだろう。

「わかつたぜ、サンキュー咲夜」

私は軽くお礼を言つて咲夜から離れると、時を止めて動いたのか一瞬で姿が消えて見えなくなる。

まつすぐ廊下を歩き、咲夜に言われたとおりに右に曲がると、廊下の突き当たりにトイレの立て札が見えた。

それに向かつて歩きながら、私は窓から祖をと眺めた。とても殺し合いの異変が起きているとは思えないほどに、いい天気で、雲一つない青空が広がっている。

庭に植えてある木が風に揺られて葉っぱを揺らし、手入れの行き届いている花壇の花も花びらを広げて花を咲かせている。

「……ん？」

私が向けた視線の先に何かがいて、宙に浮いているのが見えた。

何かが宙に浮いていること自体は珍しくもなんともない。だが、よく目を凝らしてみるとそれが人型であるのに気が付き、さらにこちらに向かつて飛んできているのがわかる。

察しの悪い私は、それでも気が付くことができずにその人物を眺め続ける。

「……っ！」

殺氣だつた敵の顔を見て、攻撃の直前でようやく敵の奇襲なのだと私は気が付いた。

東方異戦線 第8話 尋問の始まり

ドオオオオツ!!

赤いレンガで作られている壁と、それにはめ込まれている大きな窓を蹴り壊しながら、鴉天狗の文が紅魔館の中に飛び込んできた。

「うわあああああっ!?」

レンガや碎けたレンガの破片と、粉碎されて粉々になつたガラス片が私に降り掛かってきた。

私はガラス片が目に入らないように顔を両手でガードした時、飛んできているどのガラス片よりも圧倒的に上回る速度で、特徴的な黒色の黒い羽を広げた文が私の目の前に降り立っている。

「ひつ……」

殺氣立っている文の瞳に、私は既に半分泣き出しそうになっていた。

「妖夢さんが言つていたとおりですね：なんだか弱くなっていますね：魔理沙さん。こちらとしては好都合ですし、丁度いいので来てもらいましょうか。ちなみに拒否権はありませんので」

掴んだ。

「いぎ…つ…!?

首が締まつて息ができず、目を白黒させている私は文の腕を掴んで放させようとするが、天狗の握力に無理に剥がしたら首の肉を持つていかれそうで断念するしかなくなってしまう。

今の爆音に反応した靈夢たちが集まつてくる前に、文は飛んでくるガラス片やレンガを能力の風で吹き飛ばし、自分が入ってきた壁の穴から私を掴んだまま高速で飛び出した。

「うあああああああああっ!?

人が耐えることの出来る速度を超えて飛んでいるため、室内だつた景色が一気に森に変わり、さらに空へと見える景色が変わっていく。

ギリギリで魔力での強化が間に合つたが、正直なところはキツすぎる。
「うるさいですね……魔理沙さん、少しは静かにできないんですか?」

文がまた掴んでいる首を絞め、息をすることの出来ない私は状況について行くことが出来ずにパニックに陥つてしまい、私を掴んでいる文から逃れるためにもがく。
「…いいかげん、やかましいので少しの間だけ眠つてもらうことにしましょうか」

文の苛立つたような冷たい言葉に私は寒気し、体をさらに魔力で最大まで強化した。

私の抵抗など気にもかけていなかつた文は、鬱陶しいと言いたげに幻想郷で最速を誇つてゐるその速度を使つて私のことを地面に押し付けてくる。

それだけの行為であるが、その運動エネルギーは周りを破壊するのに問題ないほどにあつたらしく、爆発があつたかのように地面に私を中心にして放射状に亀裂が入り、衝突の衝撃で土の塊や岩などが浮き上がる。

さらに衝撃は乾いた砂も大量も舞いあげてしまい、視界を一メートル先も見えなくなるほどに遮った。

そして、凄まじい速度で地面に押し付けられた私の体に衝撃の分の激痛が襲つてくる。

強化した私の体に強い負荷がかかり、最大までの防御と言えどこの世界では中途半端な防御力であつたらしく、防御力以上の圧力や衝撃が体のあちこちの部位に与えられた。

それに加えて文が私を地面に押し付けた時、タツクルをするような体勢であつたため、特に腹部に潰れるような強い圧力がかかつたことで胃やその他の臓器も潰れてし

まつたらしく、傷口から出血した血が筋肉などの運動により、変に負荷がかかつたらしく潰れて引き裂かれた組織の肉片が血と一緒に吐き出された。

「……つ……か……つ……!」

全身に負傷をおつてゐる私は、肺から絞り出された空気が声帯で波長を変えられた声となり、掠れた声で絞り出された。

それと同時に胃の組織だと思われる血で真つ赤に染まる肉片が口の中に残つていたのか、血と一緒に流れ出てくる。

「あ……ぐ……ふ……ぐ……あ……！」

あまりの激痛に体が時折痙攣して、ビクビクと震えてしまふ。

私の腹の上に立つ文が、こつちを睨んでいるのが見える。

「…」

私が地面に叩きつけられた時の衝撃で、高く舞い上がつていていた石や土の塊がパラパラと雨のように降つてきた。

「…さてと、靈夢さんたちが来る前にさつさと行きましょか」

冷めた目つきのまま、文が今度は私の胸ぐらを掴んでじょじょにスピードを上げながら空を飛んだ。

「つ……！」

ものすごいスピードで遠ざかっていき、小さくなつていく紅魔館に私は手を伸ばそ
うとした。しかし、手を伸ばしきる前に私は気を失つてしまつた。

氣絶していたせいでどれだけの時間がたつたかわからないが、意識が覚醒に少しだ
け傾いてそれに近くなつた時に頬に鈍い痛みを感じた。

「…………く…………お…………い……」

意識が完璧に覚醒している訳では無いため、言葉もきちんと聞けず、処理できてい
ないため途切れ途切れで何を言つているかまつたく理解できない。

そんな私にもう一度頬にきつい一撃を誰かが食らわせると、今度はさつきよりも強
い痛みを感じた。

「うぐっ…………！」

頬を拳で殴られたせいで歯に頬が打ち付けられて、歯で肉が裂けて口の中が血の味
がほんのりとする。

「…………こは……？」

腹部の鈍い痛みを感じながら口の中にある胃から上がつてきた血を吐き出し、目を開いて顔を上げるとすぐ目の前に誰かが立つていて見えた。

「ようやく起きたようね、魔理沙」

私の髪の毛を誰かがむしり取るように掴んできて、髪の毛が強く引っ張られてとて

も痛い。

「う…つ…」

ようやく起きた私の髪の毛をつかむ永琳が、私の意識がきちんとあるのかを確認したところで手を離した。

私の世界にいる永琳と同じ、紫と赤色という特徴的な服を着ていて、白っぽい白髪も全く同じである。

「…そういえば、あなた怪我をしてるんでしよう？」

そう言つた永琳が瓶に入つてゐる液体状の飲み薬をポケットから取り出し、捻じるタイプの蓋をひねつて開けて私に近づいてきた。

「永琳…何をする気なんだよ…！」

ゴボッと血を吐きながら掠れた声でつぶやく私に、永琳は無理やり瓶の口をねじ込んで、中身の液体を私の口の中に流し込んだ。

口から瓶を出させようと手を伸ばそうとしたが、私は手をそつちに伸ばすことが出来ないのに気がついた。

私は椅子に座らせられているわけだが、肘掛の上に置かれていた腕に、太くて頑丈そうな革製のベルトのようなもので腕を拘束されている。

だが、薬は私が飲まなければいいだけだ。かなり苦いが我慢すればどうつてことは

無い。そう思つていた薬を飲まない私に、永琳が屈んで静かに耳打ちをした。

「飲まないと殺すわよ？」

「っ！」

ドスの効いた永琳の声に恐怖してしまつた私は、口の中にある飲み薬を嚥下してしまう。

永琳は瓶をさらに傾けて、小さな瓶の中身の液体を私の口の中に注ぎ、それを飲み込んだ私の潰れた胃の中に流れ込んだ。

すると、しばらくするとさつきまでズキズキと痛んでいた痛みが消えていき、ついには無くなつた。

「…回復薬よ、せつかくあなたを生け捕りにしたつていうのに、このまま見殺しにするはずがないでしよう？」

そう言いながら永琳は私の前でしゃがみ、私に視線の高さを合わせる。

「それじゃあ、本題に入つていきましょうか」

「ほ…本題？」

私が呟くと、永琳は少しの間を開けて呟いた。

「……。異変を始めた側も…始められた側も…もうなりふり構つている余裕はない状態なのは、あなたもよく分かつてるはずよね？だから、私たちは容赦はしないことにし

たわ

永琳のすぐ横に机があり、その上に縦に置いてある周りを鉄やプラスチックなどで加工されているアタツシユケースを横に倒し、アタツシユケースを閉じるための金具をパチンと永琳は外す。

「…私に…何をする気なんだ…?」

目の前でアタツシユケースを開く永琳に気を取られていたせいで気が付かなかつたが、彼女以外にもこの部屋には何人なの人影が見えた。

上下左右前後をコンクリート性の壁で覆われていて日の光などは全くなく、天井からぶら下がっている豆電球だけがチカチカと時々点滅し、私の周りを頼りなくてらしていて、永琳以外の人物はわからない。

緊張で呂律の回らない私は、こちらをちらりと見た永琳に静かに聞いた。

「何をする気?それは本気で言つてるの?それとも私をからかつてているのかしら?…あなたなら説明なんかしなくてもわかるでしょう?」

永琳はそう言いながら留め具を外したアタツシユケースを開いた。

東方異戦線 第九話 尋問

アタツシユケースを開いた永琳はその中からペンチと呼ばれる物を挟むための道具を取り出し、シンブルな作りであるその道具の挟む部分を開くと年季が入っているらしく、ギギツと金属のこする低い音が私の耳に入つてくる。

できるだけ挟んだものを離さないようにするために摩擦力が増える加工がしてあり、物を挟む部分がギザギザになつていて、それで私の人差指の爪を挟んだ。

「…つ…ひい…！」

なんとなく何をされるのか分かつた私は、まだ何もされていないというのに恐怖で目に涙がにじみ出てきてしまう。

「…さて、靈夢は…いや…靈夢たちはどこからこちらを攻撃するつもりなのかしら？」

別世界から来ていて、記憶がなくなつてているということで行動しているが、こちらに来たばかりの私は記憶がなくなつてているのと同じぐらい状況の理解ができていない。

どのような奴がどんな異変を起こしているのか、まったくわかつておらず、そんな私は靈夢たちがどうやつてどの辺から異変を解決するために動くかなんてわかるはずがないわけだ。

「さ……さあな……私は……それについては……聞かされてないから知らないんだぜ」

私が言い終わるか終らないか、そのぐらいまで言つていたときに、永琳は私の人差し指の爪を一部の肉ごと引きちぎつた。

「ひが……ああああああああああああつ……！」

私の絞り出したような悲痛な声を聴いても、永琳は眉ひとつ動かさずに今度は中指の爪をペンチで挟んだ。

「もう一度……聞くわよ……? ……靈夢たちはどの場所で、誰から私たちをたたくつもりな
のかしら?」

体を強化しようとしても、永琳は事前に私に何かの薬を打つていたらしく、体が魔力で強化することができない。

「あああああつ……!! 痛い……痛い……!!」

爪と肉がはがされ、そこから滲んできた血を震えながら眺め、私は真っ赤に染まつていく指と腕かけを見て気分が悪くなつてくる。

「答えなさい、魔理沙！」

いつまでも答えない私に永琳がしごれを切らし、少しだけペンチを持ち上げた。それだけで爪が少しだけベリベリッとはがれ、はがした部分から血があふれてくる。

前に文にこの場所に連れてこられた……だから、私は何も知らないんだよ!!」

私が叫んだとき、永琳が半分ほど剥がしていたベンチで挟んでいる爪を上に持ち上げて完璧に剥がした。

「…………!!」

耐え難い痛みに私は叫び声を上げようとしたが、永琳がこちらに手を伸ばして私の口をふさぎ、叫び声を出すことはできない。

「嘘はよくないわよ……魔理沙、靈夢が一番信頼を寄せてているあなたに、事前に作戦を伝えないわけがないわ」

そう言いながら永琳はベンチから私からはがした爪をとつて床に投げ捨てる。

「……」

私はこっちの世界の自分のことは全く知らない。だから、下手なことをいうことはできないし、敵に自分の弱点をさらすようなことはできない。

こっちの世界の人はなんだか、感がよさそうだ。変なことを口走ればそこから私の正体にたどり着くことができそうだ。

「さあ、さつさと情報を言つて楽になりなさい……言えば命だけは取らないわ」

甘い言葉で私に情報をはかせようとするが、その手には乗らない。敵対する奴は生かしてはおかないと。絶対にすべての情報を話してから私は殺される。

靈夢がチルノを殺した時点での異変は、私が闘つてきた弾幕戦などの生ぬるいものではなく、容赦情けのない殺し合いである。だから靈夢たちが来るまで、私はこれに耐えなければならない。

「……魔理沙、答えなさい。：靈夢はどういう順で戦うつもりなのかしら？」

永琳は私の耳元でそうつぶやきながらさつきまでのよう丁寧にペンチで爪をつかむのではなく、荒々しく指先の肉も一緒に挟んだ。

「……」

痛みに耐えようと、私は歯を食いしばりながらギュッと目を閉じると、永琳がお構いなしに私の薬指の爪を剥がした。

「あああああああああああああああ！」

私が絶叫し、狭い部屋の中を大きな声がこだまし、永琳がうるさそうに眉をひそめると私の口を塞いだ。

「……師匠、魔理沙の尋問は私に任せていただけませんか？」

暗闇の中から瞬く電球の下に現れたのは、薄紫色の長髪に、ウサギの付け耳を頭に付けた赤い瞳を持つ。鈴仙・優曇華院・イナバだつた。

見た目は大体同じであるが、私がいる世界と違うところが少しだけあり、右目に包帯が巻かれていて、眼帯のようになつてている。

「…鈴仙？」

「永琳が私の口に押し付けていた手を離し、後ろから近づいてくる鈴仙を見た。

「……師匠、私は月の兵士でした……敵から情報を引き出すための拷問術も教わっています。……私に任せていただけですか？」

永琳は数秒間、考え込んですぐに結論を出す。

「じゃあ、あなたに任せるわね……鈴仙」

自分よりも情報を聞き出す術が上手いものに任せるのは当たり前で、永琳が私の前からどけると鈴仙が入れ替わりで私の目の前に立つ。右目には包帯が巻かれてその瞳を見る事はできないが、その目がある部分に血がほんの少しだけ血が滲んでいて、なんだかわからないが私は鈴仙が醸し出しているその雰囲気がとても怖くて目をそらした。

「……」

「あなたから出ている波長……なんだか、前とはまるで別人のようね」

鈴仙が私の左頬に触れてから、ゆっくりと指を逸らしている左目の方向に移動される。

「……人の性格はそう簡単に変えられるわけじゃない……どんな人間だろうともね……上つ面は変えることができても、根柢の芯は変わらない……たった一日でどうやつてあの荒々しい性格を変えたの？」

純粹に私の性格が少しばかり変わつてることに少しばかり興味があるらしく、鈴仙は尋問前に私に聞いてくる。

「……なんでそんなことを聞くんだ？」

私がそう聞くと鈴仙が一度私から離れて、部屋の隅に設置してある木製の机の上に置かれている何かをいじりながら呟く。

「さつき言つたでしよう？ 今あなたはこれまでのあなたと比べると、もはや別人といえる……どうやつてそんなに変わることができたのか、まともに口が利けるうちに聞いておきたかったからよ……それとも、性格が変わつたんじゃなくて……本物と入れ替わつているのかしら？」

そういうながら鈴仙が取り出したのは、先端に針のようなものがついているロープに似たチューブだ。

片手に一本ずつそのチューブを持つてゐる鈴仙が先端についている針同士をくっつけると、雷のような音を出しながらまばゆい光と火花を散らす。

「……！」

これから鈴仙にされることが頭の中をよぎり、私は血の気が引く。

「……多分、あなたが想像していることを今からやるわ」

鈴仙はそう言いながら、どこに続いて何に繋がつてゐるのかこちらからは見えない

チューブを持ったまま、ガタガタと震える私の目の前に立つた。

「もう一度、聞くわ……靈夢はどういう手順で私たちを攻撃するつもりなの？」

鈴仙の感情のない目で見られ、私は体を小刻みに震わせながら呟く。

「知らない……私は……知らない……！」

そう答えると、鈴仙はため息をついて両手に持っている電気が流れている針を私の両手に押し付けた。

東方異戦線 第十話 助け

冷たいひんやりした金属の感覚が、皮膚に感じる間もなく全身を電気が駆け巡る。

「……………！」

体に流れる電気に、私はナイフで切り裂かれているような鋭い痛みを全身に感じ、声をあげて叫ぼうにも筋肉が硬直して叫び声すらも上げることができない。

筋肉が硬直しているせいで呼吸をすることができず、失神しそうになつていて私から鈴仙は両手の針を離した。

「……っ！！……………はあ……………はあ……………」

電気の流れが止まり、筋肉の硬直と切り裂かれているような痛みから解放された私は、酸素が回らずクラクラする頭を使って呼吸をする。

「魔理沙、言わないなら死ぬまでこの電気を流し続けてもいいのよ？」

ドスの利いた声で鈴仙が私をにらみつけるが、私は息が切れて何も答えることはできない。

「…そうそう、魔理沙」

鈴仙の後ろに下がつていた永琳が鈴仙の横に歩いてきて、ぐつたりとして酸素を求める

て喘いでいる私に言つた。

「…………？」

下を向いていた私は肩で息をしながら顔を上げ、永琳の方向を見ると彼女は腕時計に目を落としている。

「さつき飲ませた薬についてなんだけど、効果が出てくるのは遅いけど失神しなくなる作用もあるから、失神して尋問を一時的にのがれて助けが来るまでの時間稼ぎをしようとしてもできないわよ？」

私の考えを見透かしていたような永琳の話を聞いていた最中から、私の体に異常が起き始める。酸欠気味でクラクラしていた頭の中が急にすつきりしていくのだ。

「じゃあ、もう一度聞くわよ？……靈夢はどこから攻撃を仕掛けるつもりなの？」

「……な……何度も言つてるだろ…………私は何も知らない……！」

私が鈴仙をできるかぎり威圧するように睨み付けるが、今の鈴仙からしたらこれほどまでに威圧感のない威嚇もないだろう。彼女は表情一つ変えずに呟く。

「…そう」

その一言が終わるとほぼ同時に私の両手に二つの針を押し付けてくる。

「…………っ！」

電気が再度私の体の中を駆け巡り、ズタズタに引き裂かれるような痛みが体中に広

がつていていく。

呼吸ができず、酸欠状態になつていくがさつきのように意識が遠のくことはない。永琳に飲ませられた薬が効いてきているせいだろう。

さつきの倍以上の時間電気を流されたころ、鈴仙が私からようやく鉄の針を離し、一時的に電気から私を開放する。

「……はあ……はあ……はあ……!!」

体が痙攣し、びくびくと手足や体中の筋肉が震えて痺れが残る。まるで一日中走つてきたのではないかと思うほどに体が脱力し、私は顔を上げることすらできない。

「…魔理沙、靈夢たちはどこから私たちを攻撃するつもりなの？」

鈴仙が私に休む暇を与えずにそう告げ、私を冷やかな目つきで見下ろしながら私の両手に針を添えたとき、唯一この部屋に入ることのできる扉の方向から声が聞こえた。

「そうね…。手始めにこの場所からにしようかしら」

分厚い金属でできた扉が部屋側に大きく歪み、蝶番の耐久力を衝撃の威力が上回ると扉とともに千切れ飛んでくる。

私のすぐ横をコンクリートでできた床を削りながら扉が飛んできて、そのまま後方の壁を破壊する。

破壊された壁から光が差し込んで、私の背中を日の光が照らす。

「……靈……夢……」

驚いて目を見開いた鈴仙が後ろを向くと、返り血まみれでお祓い棒を持つ右手の甲で頬を拭きながら靈夢がこの部屋に入つてくる。

「……魔理沙、大丈夫かしら？」

靈夢はそう言いながら、左手で引きずつっていた何かをこつちに放り投げた。

ドチャツと水気を含む音を立てながら床に落ちたそれは私もよく知る人物だつたが、トレードマークの垂れ下がつたウサギの耳が無ければわからなかつたかも知れない。そのウサギ耳も片方が千切れているが、チルノたちと変わらないぐらいの身長と首に下げている人参のネックレスをつけているてゐは血まみれで、体の数か所から大量に血が出血しているのが見える。

「てゐ!!」

ピクリとも動かず、生きているのか生きていいないのかわからぬてゐを鈴仙が助けようと動こうとしたとき、その鈴仙の横を小さくて細い物体が高速で通り過ぎた。

ガチンツ！

私の腕を縛っている革のベルトを固定してゐる金属を靈夢が飛ばした妖怪退治用の針が正確に打ち抜き、部品を大きく損傷させて私を開放される。

「……くつ……」

鈴仙が手の形をピストルを真似たようなものにし、靈夢に向かえた。

発射音はなかった。でも、確実に何かが発射されたのだけはわかる。靈夢が横に動いて鈴仙の弾丸をかわし、高速移動した弾幕の空気を切り裂く甲高い音が部屋に響く。

「鈴仙、とりあえず…あなたは殺すわ」

靈夢がチルノを殺したときと同じ目をして、血で真っ赤に濡れているままのお祓い棒を鈴仙に向けて構えた。

「てゐをよくも……！殺すのは、こっちのセリフだ……！」

鈴仙が手に持っていた電気が流れている針を投げ捨てて、ファイティングポーズを構える。その構えには無駄がなく、月の兵士だつたというのを実感させられる。

靈夢がコンクリートにひびを入れながら踏み込み、鈴仙に襲い掛かった。魔力で体を守るために全身を覆っている魔力の膜、それらが鈴仙と靈夢が拳と武器を振るうごとに役目を果たして空気中に結晶のようにまき散らされていく。

「はあっ！」

鈴仙が拳を突き出し、靈夢に拳を叩き込んだ。靈夢が鈴仙の手の甲にお祓い棒で触れ、少し力を入れて拳の軌道をそれさせた。

左側にそれさせた鈴仙の腕を左手で掴みながら、拳をそれさせたお祓い棒を鈴仙のひじに叩き込み、ひじの骨をへし折る。

「うぐ…あ…!？」

「後ろに引き下がろうとした鈴仙の腕から離した左手で胸倉を掴み、お祓い棒で鈴仙の頭を強打した。

その一撃で鈴仙の頭部から血が流れ出し、薄紫色の髪の毛を赤く染め、額から血が顔に流れ落ちていく。

頭を左手で押さえながら一步後ろに下がつて靈夢から逃れようとするが、靈夢が掴んでいるせいであまり下がれず、下がった分以上の距離を彼女に詰められてしまう。

靈夢は鈴仙を殴るとお祓い棒を振り上げるが、横から飛んできた一メートルはある巨大な矢をお祓い棒を振り下ろすことで弾き飛ばす。

靈夢が矢を弾くために振り下ろしたお祓い棒を振り上げ、その先にいる鈴仙をなぐり殺そうとしたとき、電気を流されていた影響で回らない足をできる限り回転させ、靈夢の手を掴んで彼女が殴るのを間一髪で阻止することができた。

「…やめてくれ…靈夢…：もういい…！」

私がそう言つて靈夢を止めると、彼女は不思議そうな目を押して私を見ながら呟く。

「でも魔理沙、こいつはあなたを痛めつけてたのよ…？そんな奴はそれ以上の苦痛を味あわせるために殺したほうがいいわ」

靈夢が掴む鈴仙の胸倉に更に力を入れて握ると、握った部分の服がこすれてギチツと

音を立てる。

「…靈夢、そんなことはしなくてもいい…!!…増援が…来る前に一度退こう…！」

私がそう言うと、取り囲まれている状況で私を守りながら戦うのは分が悪いと判断したのか、掴んでいた鈴仙から手を離した。

ポタポタと血を流して意識がなく、右腕が折れている鈴仙が力なくコンクリートの床に崩れ落ちる。

周りを見ると、私の尋間に立ち会っていた奴らも不意を突かれたとはいえ、すぐに立ち直つて戦闘態勢に入っている。

しかし、肝心の素顔が見えない。光が少し入ってきてはいるが闇のほうが濃くてどんな人物がいるのかがはつきりとは見えない。

「…そうね…」

体がしごれ、まともに走ることもできない私を靈夢は背中で背負ってくれた。

「一度帰りましょーか」

靈夢は私を背負つて言い、周りの奴らが攻撃を仕掛けてこないよう針を投擲して牽制しながら前に進むと、慣性の法則で少しあいて行かれて、なびいた髪の毛を掠るようにして、靈夢の牽制の針が投げられてはいなかつた永琳が放つた矢が飛んでくる。だが、私にその矢は当たらない。

靈夢は来た道を戻るのではなく、扉を吹っ飛ばしたときにあけた穴から攻撃をかわしながら外に飛び出し、紅魔館に向かつて空を飛んだ。

東方異戦線 第十一話 二人の天狗

私がいた場所は永遠亭らしく、屋敷を出るとすぐに迷いの竹林に出た。靈夢はランダムに生えている竹を左右に避けながら高度を上げようとしたとき、彼女は何かを感じ取つたのか地面に体が当たるギリギリまで高度を下げた。

すると、さつき私たちが飛んでいた高さを空振に似た衝撃波のようなものが通り過ぎ、広範囲にわたつて十数メートルになるほどまでに成長した竹が半ばから切断される。

「……これは……文の鎌鼬……？」

私が呟いたとき、靈夢がいきなり急停止した。

「うおあ……!?

結構なスピードが出ていたため、進んでいた方向に身を投げ出しそうになつた私の鼻先の数センチ先に鎌鼬で切斷された竹が地面に落ち、深々と地面に突き刺さる。

もう少し顔を出していたら顔の肉を持つていかれていたかもしない。

「つ……ひい……つ!!」

のどから絞り出したような声を出して悲鳴を上げた私に構わずに靈夢が身を翻すと、

後ろから大の大人がやつとの思いで使いこなすことのできそうな大太刀が振り下ろされ、私の金髪の毛先をほんの少しだけ切った。

純白といえる白髪にオオカミの耳、頭に文と同じ赤色の山伏風の帽子と髪の毛と同じ白色の服装の柾は大太刀を振り下ろしてから一秒もその場にとどまらずに飛びのき、靈夢からの追撃を受けないようにしている。

初めに落ちてきた竹に続いてほかの切断された竹も落ちてくるが、靈夢は当たらないよう器用に避けていく。

「……文と柾……この場所で戦うのは……少し骨が折れそうね」

文は大量に生えている竹の中を自由に飛び回り、柾は竹などを足場にして縦横無尽に飛び回つて移動し、私たちをかく乱しようとしている。

すでに私は目が追い付かなくなつていて、どこを柾と文が移動しているのかわからな
い。

「……魔理沙、一人の動きを目で追える?」

靈夢が迷いの竹林を抜けるために全速力で移動しながら私に聞いてくる。

「いや、早すぎてとてもじやないが追いつくことができん」

私は周りを見ながら呟くと、柾が横方向から大太刀を上段から振り下ろしてきた。

切るというよりも、こん棒などのように殴つた方がダメージが大きそうな大太刀を靈

夢はすんでのところでかわし、大太刀は止まることなく振り下ろされて地面をたたき壊し、土や石の塊がこつちにまで飛んでくる。

それらを容易くかわしながら、周りを飛び交っている文の鎌鼬を上下左右に不規則に動いてかわすせいで、がくがくと揺らされる私は酔つて気分が悪くなり、気持ち悪くなつてくるが何とかこらえて靈夢にしがみつき続ける。

「魔理沙、しゃがんで！」

顔を上げていた私に靈夢が叫んだ。

「っ！」

私が靈夢の背中に顔をうずくめるようにして頭を下げる、正面を飛んでいる文が飛ばしてきた鎌鼬が私の帽子を吹き飛ばした。

「魔理沙！ 大丈夫!?」

帽子が吹き飛ばされたことで私に何かあつたのかと心配になつた靈夢が、前方に進む速度を上げながら私に言う。

「ああ……なんとかな！」

私は靈夢に返事を返しながら手先に魔力を送り、私たちを攻撃するために前方でホバリングしている文に向けてレーザーをぶつ放す。

自分に向かってきてるレーザーに文は手を向け、竜巻のようなものを私にはなつて

くる。

私の放ったレーザーを巻き込んで包み込み、レーザーをかき消しながら竜巻がこちらに向かってきた。

それを見た靈夢が横に避けて攻撃をかわそうとしたが、それよりも早くに文に向けていた腕が竜巻に飲み込まれてしまう。

「うああつ!!」

体を保護するために魔力の膜で体を覆っていたが、竜巻が魔力の膜を剥がしてしまった。右腕を竜巻の中に発生している小さな鎌鼬にズタズタに引き裂かれてしまった。

鎌鼬に切られた腕の傷口から出血した血が、竜巻の風に乗って私の頬に飛び散る。

「つ…ああああああつ!!」

竜巻から無理やり腕を引っ張り出し、激痛にうなりながら私は腕を抱えた。

「魔理沙、尋問を受けてたあとなんだから無理しないでちようだい。私に任せておいて」

靈夢は言いながらジャラツと妖怪退治用の二十センチはある長い針を左手で数本取り出し、前方に飛んでいる文に向けて投げつけると同時に前転をするようにしてジャンプすると、地面から離れた私たちの足元を柾の大太刀が薙ぎ払われる。

「…。……魔理沙」

文が風を操つて靈夢が飛ばした針を跳ね返し、それと一緒に鎌鼬を飛ばしてくるが靈

夢がお祓い棒でかき消して私に呴いた。

「…なんだ？」

「…任せておいてつて言つておいて悪いんだけど…少しの間、別行動をしましょう…さすがの私でも魔理沙をおぶつたまま二人を相手にするのは少し面倒」

霊夢はそう呟くと、私の返答を聞かずに私の肩を掴み、進行方向から見て左方向に私を投げる。

「へ……うおあああああああああああああつ!?」

前方に進んでいた速さに靈夢が投げた腕力が加わり、靈夢からものすごい速度で離れていく。

竹などに視界が遮られてすぐに靈夢の姿が見えなくなるが、彼女は柵を引き付けていてくれているらしく、火花に似た使われた魔力の光る結晶が薄つすらと見えた。

文がそう言いながら私と同じ速度で並走し、掌の上で鎌鼬を発生させていた。

私がもともといた世界では文はいつも手を抜いていて、彼女の本当の実力で戦ったことはない。そのためこっちの文の実力など私には計り知れないほどのものだろう。できればやりあいたくない敵の一人だ。

だが、私も靈夢にばかり頼つていられない。

「…来い！文!!」

私は叫びながら文をにらみつけた。

東方異戦線 第十二話 天狗の戦い

「…」

啖呵を切つて挑発したはいいが、いつたいどうやつて文に攻撃をするか。正面からやりあつても私に勝ち目はない。

「文…・・・柾を一人で戦わせていいのか！相手はあるの靈夢だぞ！」

私がそう言つて注意を自分からそらさせ、攻撃するための隙を作ろうとするが、文は冷静なまま背中から生えている黒い翼を羽ばたかせ、こちらに高速で向かつてきた。

「…つ！」

手に魔力をため、レーザーを文に向けて放とうとしたが文の方が断然動きが速く。私が文に向けていた手を掴んでくる。

「魔理沙、私や柾は死ぬ覚悟はできています…でも…なんだか、あなたの目を見ていると覚悟なんてないように見えますね」

天狗の握力に腕の骨が碎かれたと思うほどの激痛が電撃のように走り、腕がしごれて力が入らず、使い物にならなくなつてしまう。

「あ…!…うぐあつ…！」

私が叫びながら抵抗をしようとするが、文が私のことを振り払うように手を離し、その場で回転して勢いをつけて私の脇腹に回し蹴りを食らわせてきた。

「か……あ……あがつ……!!」

体がすごい速度で動いているのだろう。視界が文に紅魔館から運ばれた時のように流れていき、私が放つレーザーぐらいのスピードは出ているのだろうか。蹴られた衝撃で上下左右がどの方向なのかが全く分からず、私は地面に転がり落ちてしまう。地面の土をまき散らしながら私は頭と手足や背中を交互に打ち付け、土だらけになりながら転がっていく。

「……つ…………くそ……!!」

私が呟いたとき、すさまじい速度で動く体に比例して目で追うことが困難な速度で動く視界で、半分が地面に埋まっている巨大な岩石が向かう先に見えた気がした。

しかし、それは気がしたのではなく本当にそこに岩は存在していたらしく、私は転がる勢いを殺すことができずにそのまま岩に突っ込んだ。

ベギヤツ!!

後頭部を勢いよく巨大な岩に打ち付けた。

私の頭を中心にして、パツと赤い花が咲いたように見えるように、後頭部から打ち付けた岩に血が飛び散る。

でも、頭蓋骨が碎けたり脳漿を岩にぶちまけずに済んだのは、かろうじて魔力で体を強化していたおかげだろう。

しかし、それでも後頭部をぶつけた衝撃と痛みが同時に襲い掛かってきて、私は頭を抱えて地面をのたうち回る。

「いぎ……ああああああああっ!!」

情けない声で叫んでいた私の傍らに、文が静かに羽を広げて減速しながら舞い降りてくる。

「……魔理沙さん、いつものように圧倒的な力で：私たちのことをグリグリと押し付けながら静かにつぶやいた。

「……魔理沙さん、いつものように圧倒的な力で：私たちのことをねじ伏せないのですか？」

文の足を掴んで自分から引き離そうとしている私に、彼女はさらに踏みつける力を強めながら呟く。

「……の……足をどこでくれたら……そうしない理由を教えてやるぜ……！」

言いながら文の私を踏んづけてくる足を押し返そうとするが、明らかに文の方が力が強くて足がピクリとも動かず、それどころかさらに強い力で私の頭を踏み始める。骨がゆがむような異音が私の頭に響き始め、これ以上はやばいと本能が語り掛けてくる。

「お断りさせていただきます……それじゃあ、死んでください」

文が私を踏み殺そうとしたとき、私は彼女にバレない様に詠唱していた魔法を自分自身にも効果があるようにならかに発動させた。

「私は魔法使いだ……物理的な攻撃方法は苦手なんだよ！」

半重力魔法、発動。

文が踏みつけていたことによる頭への圧力が消え、私たちの体が宇宙空間にあるように浮き上がり始める。

「これは……!?」

私たちだけでなく周りの石ころなど、地面などに固定されていない物が宙に浮き始め、私は近くを浮き上がってきた岩石を何とかつかみ、それを文のいる方向に向けてぶん投げた。

体を魔力で強化しても飛ばせるかわからないぐらいの重量はありそうな巨石が、無重力状態に慣れていない文の腹に直撃し、私から離れていく。

「がはっ……！」

私も物を投げたは反動で後方にゆっくりと体が移動をした。

そうしていると岩を当てられた文が、半重力魔法が作用している範囲から出てしまった。地面上に落ちるのを確認しながら私は魔法を解除し、靈夢が私を投げた方向に向けて

走り出した。

「靈夢が私をこつちに投げたということは、何か目的があつたということなのだろう。
逃がしませんよ！」

すぐに立て直した文が物の数秒で私のもとに迫りついてしまい。靈夢に投げられた
時のように右側を並走している。

「つち……」

私は舌打ちをして魔法を発動するための詠唱を走りながら済ませて再度、半重力の魔
法を発動させた。

さつきよりも強い半重力を自分の隣の空間、文と自分の間に半重力の空間を作り出
す。

かなり強めの奴を発動させたことで竹や大きな土の塊、埋まっていた岩石なども浮き
上がり始め、文と私の間に土などのカーテンが出来上がる。

「……」ざかしいですね……

文が大量の鎌鼬を私に飛ばしてくるが、どの攻撃も私に届く前に岩や土、竹を切り裂
いてそこで止まる。

さらに私と文の間をかなりの長い距離で半重力の空間を作っていたため、少しは文の
攻撃を走りながらでも効率よく避けていられるだろう。

「このまま突っ切らせてもらうぜ……！」

私が体を魔力で強化して全速力で走ろうとした。だが、

「そうですか、じゃあ少しだけやり方を変えてみることにしましょう」

「……？」

文は取り出したスペルカードに大量の魔力を流し込み、カードに書き込んでおいた回路を起動させた。

パキッ！

文がスペルカードを右手に持っているオレンジ色で紅葉の葉をつなげたような芭蕉扇のようなもので叩き壊すと、魔力を流されて変質化した紙がガラスが割れるような小気味いい音を響かせながら碎け散る。

「風符『天狗道の開風』」

東方異戦線 第十三話 冷血

文がスペルカードを碎き、そのカードの細かい結晶が太陽の光の照らされて雪のようにきらきらと輝いている。とても綺麗だが、見とれている暇はない。

ゴオオオオオオオツ!!

紅葉の芭蕉扇の周りに風が巻き付いていき、それがだんだんと強く大きくなつていくのが見ていてわかる。

「くらえ！」

文が自分の武器を私に向かつてぶん回し、纏つた風を私に向けて飛ばしてくる。

風の形が見えるほど強い風が、直径二メートルほどの大きさの竜巻を作り出し私に向かつてきた。

反重力で浮かせていた岩や竹、土の塊などは吹き飛ばすか竜巻の中で発生している大量の鎌鼬で切り刻んでいく。直接当たつていな岩や竹も竜巻が巻き起こす風に竜巻の通る道を作つてしまい。盾にもなつていない。

「うおあああああああああっ!!

魔力を使つて体を浮き上がらせながらジャンプした。だが、右足が竜巻に巻き込まれ

てしまい。そのまま竜巻の中に引きずり込まれてしまう。

魔力で全身をガードするが、常に巻き起こっている鎌鼬に体や服を切り刻まれ、体中から出血が起る。

魔力の膜が薄くなり、無くなつていった場所から鎌鼬に切り刻まれ始める。初めは狭かつた鎌鼬に切られている部分もだんだんと広くなつていき、物の数秒で体中を切り裂かれ始める。

徐々に出血が多くなり、血が付いていない場所を探す方が難しいぐらいにまで血まみれになつていく。

竜巻に勢いが弱まるとすさまじい勢いで竜巻の中を移動していた私は、引きとどめようとする竜巻の力をぶつちぎつて竜巻の中から飛び出して宙を舞う。

「かは……っ……！」

電気を体に流された時の切り裂かれるような疑似的な痛みとは違ひ。今度は本当に物理的に切られている痛みに涙が滲んでくる。

「…まだ生きてましたか…まあ、あれで死ぬとは思えませんが…」

竜巻から飛ばされた私の数倍は早い速度で目の前に現れた文が、私に呟くと持つている芭蕉扇に風をまとわせた。

「つ！」

腕を伸ばして進行方向上にある竹を掴んで体の動きを止め、文の攻撃の射線上から体を出させる。

文が巨大な鎌鼬を放ち、紙一重で私の体を切り裂かずに竹や地面を切り裂いた。初めに私をおぶつていた靈夢に奇襲をかけていたときのような光景が作り出される。

竹を掴んでいた私が進む強さが強かつたせいで竹が大きく湾曲し、掴んでいられなくなつた私は竹から手を離してしまつた。

文がいる方向に遅れて向かつた私は、文に向かつて最大出力でレーザーをぶつ放すが文はひらりとかわすと、私に向かつて空気の弾丸と飛ばしてくる。

再度レーザーを撃つて空気の弾丸を撃ち落とすとそうとした。だが、空気の弾丸の方が一步も二歩も早く、それは高速で接近してくると私の脇腹にめり込んだ。

「がはつ……!?」

圧縮されていた空気が爆発し、私は鎌鼬が含まれる爆風に切り裂かれながら弾き飛ばされ、後方にぶつ飛ばされてしまう。

「あ……ぐつ……!?」

周りの光景から地面が近くなつてゐるのがわかり、受け身を取ろうとするがこの状況でどうやって体を動かして受け身をとればいいかわからず、私は何もできずに落ちていつてしまう。

文が私に向かつてもう一度攻撃を仕掛けてこようとするのが見えるが、受け身をとることすらできていない私にはどうすることもできない。

レーザーを文に向けて撃とうにも、地面に体が当たつて狙いがずれて当たらないだろうし、落ちたところを鎌鼬で切り裂かれてしまう。

「……くそ…………！」

私が呟いたとき、文が芭蕉扇を私に向かつて振りぬいた。その軌道は私の首をきれいに切り落とすものだ。

死ぬ。そう思つたとき、

「魔理沙あ！！」

強い衝撃を背中に感じた。それは、硬くて冷たい土の感触ではない。さらに土の特なにおいも感じることはできない。

感じたのは柔らかくて人肌に温かいぬくもりと石鹼の良い香り、それと鉄臭い血の香りだ。

「大丈夫かしら？」

お姫様抱っこをするようにしてキヤツチして抱えた靈夢が私に言つた。

「あ……ああ……なんとかな」

私が呟くと顔に少しだけ返り血をつけている靈夢が強く私のことを抱き寄せ、私を抱

えたまま靈夢は文が飛ばしてきていた鎌鼬を屈んでかわし、地面をけつて宙に浮きあがる。

「靈夢!!」

文が飛ばした鎌鼬とは別方向から血まみれの柾が出現し、ひびが入つていて半分にたたき折れられている大太刀を私たちに向かつて振り下ろしてきてきた。

「あら、白狼天狗つて意外と頑丈なのね」

靈夢は咳きながら柾の攻撃をひらりとかわし、振り下ろされて地面に埋まっている大太刀に足をかけて体を持ち上げ、柾の顔に膝蹴りを食らわせた。

「うぐっ…!?

柾が持つっていた大太刀を手から落とし、靈夢は私の体の足側を抱えていた手を一時的に離して大太刀を拾い上げる。

ひるんだ柾を拾つた大太刀で切り裂きながら身を翻すと、文が柾には当たらぬよう飛ばしてきていた鎌鼬をかわし、文に向けて大太刀をぶん投げた。

「つ!?

途中半端にかわした文の脇腹を大太刀が十センチ程度抉り、ぶつた切る。

「うぐ…!?

文が空中でバランスを崩し、地面に落ちて倒れこむ。

「ゞ）ほつ……」

文が腹から血をダラダラと溢れさせながら吐血し、地面に血を吐き出した。

靈夢が私のことを抱き寄せながら、また抱き直して後ろに飛びのくと柾が私たちがいた場所を鋭い爪で切り裂いてくる。

「くそ……」

全身を血まみれにしている柾が潰れた左目から流れ出している血をぬぐい、犬歯をむき出しにして唸つた。

柾が私たちに向けて走り出そうとしたとき、いきなり空中に現れた数本のナイフが彼女の背中に根元まで突き刺さる。

「う…………ぐううつ…………！」？

走り出していた柾が地面に転がりながら倒れこみ、血反吐を吐いて地面の土を搔きむしめた。

「あら、昨夜……遅いじゃない

靈夢が私をグイッと持ち上げて抱え直しながら呟くと、何の前触れもなしに昨夜が私たちの隣に現れる。

「遅かつた……それは私のセリフですよ、靈夢」

そういうつて現れた昨夜は両手に三本ずつナイフを持っていて、地面に倒れている文と

樺の二人を見ながら呟く。

「……くそ……靈夢だけじゃなかったのか……！」

樺が刺されたナイフに強い痛みを感じて顔をしかめて呟く。相手から見れば戦況は最悪な状態といえるだろう。

樺が私たちを睨みながら下がり、体を何とか起き上がらせようとしている文の近くで立ち止まつてこちらを警戒している。

「……それじやあ、あの一人の始末は任せたわよ……昨夜」

靈夢はそう言いながら戦つて方向感覚を失つてゐる私にはどこに向かうかわからな
いが、ゆっくりと飛び立つ。

「始末……？ 灵夢……始末つてどういうことだよ……！」

私が靈夢に聞くと、彼女は平然とした顔で言い放つ。

「そのままの意味、殺すだけよ」

何を言つてゐるのと言いたげな靈夢の目は、濁つていてとてもじやないが直視できな
いような眼の色をしていた。

東方異戦線 第十四話 やつてくる物①

「どうしたつていうの？…そんなことよりも早く帰つて体を洗わないと、血まみれじゃ
ない」

確かに、私の今の体は血まみれだがそんなことはどうでもいい。咲夜と文たちがやり
あう前に止めなければいけない。

いくら異変で敵同士になつているといつても、殺すまではしなくてもいいのではない
かと。

私の考え方をやすやすと読み取つた靈夢はまるで私の心を読んだかのように、私のこと
を見ながら呟く。

「魔理沙、これは異変だけど異変じやない。…その辺についてはわかってるの？……」
れはお互いの生存を掛けた戦争よ

そういうながら靈夢は加速し、後ろを振り返らずに進む私たちに咲夜たちの戦う音が
響いてくる。

「そうだとしても、殺すことはないじゃないか…！」

「相手は殺す気でいるのに、こちらが倒す気でいるならば私たちが殺されるわ…：：：考え

が甘いわよ……魔理沙

この世界の異変は、私がいた世界で起こつていた異変の常識は通用しない。私が元いた世界の倒すか倒されるかという生ぬるい常識は、まるで冷水にでも浸っているようだろう。

殺すか殺されるという選択肢しか、この世界には存在しないのだ。

〔……〕

彼女の言葉に私は何も言い返せない。私はこの世界の異変というものを知らないからだ。

半ばから折れ、自分のか敵の血かわからない血がこびりついている大太刀を片手に、十六夜咲夜と呼ばれている紅魔館のメイドに切りかかつた。

ガギイツ!!

本当に咲夜が使っている得物はナイフなのかと疑ってしまう。

折られてひびが入つて耐久性能の落ちているとはい、魔力で強化しているというのに咲夜の扱うナイフと打ち合うごとに細かい金属片が大太刀から舞い。太陽の光の加減で空中でキラキラと光っている。

「くっ…！」

ちようどいいタイミングで文が私が援護するためにくつもの鎌鼬を咲夜に飛ばし、そのうちに私は一時的に咲夜から離れて無理をして動かしている体を休めた。だが、ずっと休んでいることはできない。咲夜を倒すとまでは言わないが、撃退せらるのには文と二人でないとできないからだ。

ボロボロの文が投擲される咲夜のナイフをすべて打ち落とすことができず、腕や足にナイフが突き刺さって彼女の動きをさらに阻害する。

右目を抉り出されて右側を見る事のできない私は、左目だけで文をとらえて全身にある傷から血を流しだしながら、無理やり立ち上がり立派に走り出していた。

逃げることができない文に向けて咲夜が十数本にもなる量のナイフを投擲し、文を刺殺しようとしている。

「やめろおおおおおおおおおおおつ!!」

私は雄叫びをあげながら怪我をしていて少し遅いが、今出すことのできる最高速度で走つて文の額に突き刺さるはずだったナイフが、彼女に突き刺さる寸前に大太刀で弾き飛ばす。

何とか文がナイフにハチの巣にされる寸前に、彼女がいる場所にたどり着くことがで

きた私はナイフの進路上に立ち、文のことを守るために残りの飛んでくるナイフを撃ち落とすために大太刀を振るつた。

「殺させない…文だけは、絶対に殺させない……!!」

私は叫びながら咲夜が飛ばしてくるナイフを迎え撃つた。

甲高い金属音を響かせながら、刃先の鋭いナイフが大太刀に弾き飛ばされて回転しながらどこかへと飛ばされていく。

私は弾かれたナイフがどこに飛んで行つたのかを確認する余裕もないまま、手に馴染んでいて軽いはずの大太刀がいやに重く感じ、剣を振る速度に支障をきたしてる気がする。

私が感じていた大太刀を振る速度は勘違いなどではなくやはり遅くなつていたようで、ついに飛んでくるナイフについていけなくなくなつてしまふ。

下から斜め上に飛んできた銀ナイフが、大太刀を振るつても遅くて当たらなかつた私の太ももに深々と突き刺さる。

「うぐ……!!」

だが、その痛みを気にしている暇はない。次から次へと休む暇もなく咲夜が投げた銀ナイフが飛んできているのだ。

「樺！私はいいから……あなたは自分の心配だけをしていなさい！」

文が私の身を案じてくれてはいるのか、必死な叫び声が聞こえてくるが私は答えることができずに大太刀をただ振るつた。

ガギッ!!

一つの銀ナイフを弾き飛ばすことができたが、代わりにもう一つのナイフを弾くことができずにわき腹に突き刺さる。

「ぐううううううつ……!!」

歯を食いしばって内臓にまで抉りこんできたナイフの痛みに耐える。耐え難いほど の激痛であるはずなのにそう感じないのは、副腎髓質から分泌されたアドレナリンが作用しているからだろう。

「結構粘りますね。どこまで持つか見ものですが」

咲夜が魔力で形成された本物と見分けがつかない、太陽の光で刃がキラリと光る銀ナイフを私たちに向けて大量に投擲する。

すでに動く速さが初めの半分以下の速度になつてきている私には、飛んでくるナイフが速すぎて片手で数える程度の本数しかはたき落とすことせず、大部分が腕や肩、足に突き刺さつた。

「つ……!」

腹や首にも銀ナイフが突き刺さり、私は動けなくなつてしまふ。しかし、倒れること

はできない。後ろには文が倒れているのだ。

「槻！」

文が何かを叫ぼうとしたが、私は咲夜が攻撃を仕掛けてこないうちに私は叫んだ。

「……文……！」

「……！」

文が口をつぐみ、咲夜が様子見をするために銀ナイフを構えていつでも投げられるよう動きを止める。

「文、あなただけでも逃げてほしい」

「……え？ 逃げて……？ 何を言つての？ 槻だけ置いていけるわけないでしよう！？」

切り傷だらけで体中から血を流し、貧血を起こしていて青白い顔をした文が私に言った。反発されるのはわかつていたことだ。

「……文もわかつてるはず……この戦い。どちらかが犠牲にならなければ……生き残れない……二人で戦いきることも逃げ切ることも不可能だ」

手に持つている半ばから折れている大太刀を地面に突き刺すことで体を支え、ブルブルと震える体が地面に倒れないように大太刀の柄を握りしめる。

「それに、……私はもう死ぬ……！」

「……つ……！」

今いる足元にはすでに血の水たまりが形成されていて、絶えず今もその量を増やしている。

「これだけ血を流せば死にそうになるのも当たり前だろう。普通の人間なら三回は死んでいるはずだろう。」

「だから、お前もここで無駄死にする前に……逃げて……！」

「……あんただけを残していけない……！それに、私だって死ぬ覚悟ならもうできる！」文がいい、切られた腹を庇いながら私に近づいてきて肩に触れるが、私はその手を振り払つた。

「栻……！」

そろそろ私たちの会話に飽きてきたように見える咲夜がいつ攻撃してきてもいいよう、私は地面から大太刀を引き抜いて咲夜に向けて構えながら言う。

「死ぬ覚悟はできているということだよな……？私は、文には生きるために戦つてほしい。……文、これは私の……最後の頼みでもある……私が闘つているうちに全速力で逃げれば、助かる見込みがある……だから……！」

私は一度言葉を切り、大太刀を振るつて後ろにいる文や私に向けて投げられた銀ナイフを弾き飛ばした。

「……逃げろ……！」

私は撃ち落とし漏らした銀ナイフが文に突き刺さりそうになるが、体を銀ナイフの射線上に移動させ、自分に刺さるのもお構いなしに他の銀ナイフを弾きながら咲夜に向かって全力で走った。

東方異戦線 第十五話 やつてくる物②

豊富に余っている魔力を使って折れた大太刀の刃先を一時的に形成させ、投げられたほぼすべての銀ナイフを叩き落とす。

「おおおおおおおおっ!!」

私が後ろの文に銀ナイフが当たらないように、文がいる場所の軌道上の銀ナイフは完璧に大太刀で碎いていく。

咲夜がいる場所に向かつて進んでいた私が、敵のいる場所まであと十メートルといったところで、後方にいたはずの文の気配が消えた。断腸の思いだつたのか、ギリツと歯を食いしばり悔しくも名残惜しそうにも、この場所から彼女は姿を消した。

短い時間とはいえ、咲夜がどう戦うかを見た。すべての戦い方を見たわけではないが、基本的なところはわかるようにはなっているだろうから、文にとつてマイナスにはならないだろう。

背中から魔力を放出し、体の進む速度を加速させて咲夜がいる場所まで一気に近づき、大太刀を全力で振り下ろす。

咲夜は両手に一本ずつ銀ナイフを持ち出し、私の大太刀をその大太刀よりも細い銀ナ

イフで受け止める。

鍛えられた鉄と銀がこすれあうことで火花が発生し、鉄粉などが空气中で燃焼牛手火の粉となつて消えていく。鎧迫り合いは少しの間だけ力が釣り合っていたが、咲夜に大太刀を押し返され始めてしまう。

「くっ…！」

押し返そと大太刀に出し惜しみをせずに力を込めたとき、魔力で作られていた大太刀が咲夜がナイフをさらに押し込んだだけであつさりと碎け散る。

私から見て、咲夜は左側に回り込み、左手に持つていた銀ナイフを逆手に持ち替えて私の左手に突き刺した。

痛覚がマヒを起こしているのか、ナイフに刺されたというのにじんわりとした形のない違和感程度の痛みが腕に広がる。

ナイフが根元まで刺さっているが、お構いなしに私は折れて半分もない大太刀を振るつて咲夜を自分から引き離させた。

「…そろそろ飽きてきましたし…この戦いも終わりにしましょう」

咲夜がいきなりそんなことを言いながら右手に持つていた魔力で形成されている銀ナイフを手から消し去り、ポケットから小さな懐中時計を取り出す。

「つ?!

あれはまずい。咲夜は時を操る程度の能力を持つていて、千里眼で遠くを見渡したりすることしかできない私には太刀打ちすることはできないだろう。

能力を発動させられる前にあいつを

『咲夜の世界』……時よ止まれ』

私が行動を起こうとしたが、すでに咲夜は能力を使って時を止めていた。

そして、次の瞬間。

私の正面や左右の方向にずらりとナイフが空中に敷き詰められており、時速数百キロという猛スピードで私に向かってカツとんでくる。

「つ……!!」

魔力を大量に消費し、今出すことのできる全力で大太刀を振るう。それによりあたりに金属音が絶えず響き、大量の銀ナイフが自分の周りに山住になつて転がっていく。

しかし、数百本にもなる銀ナイフを一人でさばくことは骨が折れるとかそういう問題ではない。不可能だ。

ある銀ナイフは刺さらずに肉だけを削いでいき、ある銀ナイフは私の胸に突き刺さつて呼吸を阻害し、ある銀ナイフは私の首に刺さつて私を出血死させようとした。

得物が一本では全く足りない。腕の回転が負傷などにより全く追いつかないのだ。

でも、この問題はすぐに解決する。ないなら増やせばいい、それだけだ。それに刀物なら腐るほどある。

自分の膝に深々と刺さっている本物のナイフを掴み、一気に引き抜きながら振り上げたときに入っていた魔力で形成されている銀ナイフを弾き飛ばした。

私をこの位置に縫い付けるための当てるのが目的ではないナイフ以外、つまり私に当てるためのナイフも致命傷になる場所に刺さる銀ナイフ以外は無視して走る。壁ともいえる大量のナイフをやつとの思いで潜り抜けた先には、二本のナイフを構えている咲夜が待ち構えていた。

待ち構えている咲夜の顔が驚愕を示している、私がこのナイフの壁を生きて潜り抜けてくるとは思わなかつたらしい。

反応が遅れている咲夜に私は大太刀で切りかかつた。外すわけのない一撃は、彼女の胸を肋骨や胸骨ごと、骨の内側で保護されている肺を切り裂いた。血や肺組織、たたき碎かれた骨片が切り口から飛び散る。

「…………っ？」

肺を切り裂かれたことで口から空気を出すことも取り入れることもできず、目を見開いて咲夜は胸を押さえて後ろに下がろうとした。

それだけでは終わらない。左手に持っている銀ナイフを咲夜のわき腹に下から突き

刺した。肉に銀ナイフが抉りこむ感触はそこに咲夜がいることを実感させる。

「お前も……道ずれだよ：咲夜！」

私がガクツと膝を地面に打ち付けて崩れ落ちた昨夜の首元を、半分に欠けている大太刀を大振りで振り回して切り裂いた。

「…………つ！」

何かを叫ぼうとした咲夜の首が回転しながら宙を舞い。数秒してから地面にドンッと生首が転がり落ちる。

ころころと転がっていく咲夜の首は、首のなくなつた胴体が地面に倒れるのとほぼ同時に動きを停止し、私が切り裂いた首の切断面からダラダラと赤黒い血が滲みだして垂れ流す。

「…………勝った……」

時折体を痙攣させる咲夜の体を見下ろしながら、私は小さな声で誰に言うわけでもなく呟く。

ポロツと手から銀ナイフを落とすと、ザクツと銀ナイフは刃の中間ぐらいまで地面に突き刺さつた。

東方異戦線 第十六話 死

勝つたという余韻を味わう前に、後ろで誰かが私が落としたナイフが地面に刺さる音と似たような音を出しながら土を踏みしめる音が聞こえてきていて、振り返ろうとした私の背中に鋭い刃物が潜り込んでくる感覚を味わった。

「……へ……？」

何が起きているかわからない私の脳は、後ろにいる人物を見てさらに混乱してしまう。

「倒したと思いましたか？……あの程度の戦いで私が死ぬと思いましたか？残念、死んでいません」

二本の銀ナイフを携えた咲夜が、私の背中を両手の銀ナイフで切り付けながら、私の正面方向に移動した。

「……なん……で……確かに……この手で殺したはず……じゃ……！？」

新たな傷で服を真っ赤に染めながら、私は疑問を口にする。

「ああ、それですか」

咲夜が私の足元に転がっている自分の死体を見ながら呟くと、能力を解除したのか死

体が綺麗さっぱりに消え去つた。

「…そうですね…これはタイムパラドクスみたいなものですよ……厳密にはそれを応用して、便利にしたものですが」

咲夜がそう言いながら両手にある二本の銀ナイフを取り出して両手でクルクルと回して弄ぶ。

「…タイム…パラドクスを…応用した…？」

説明を受けても何が起こっているのか全く理解ができない私は、じりっと後ずさつて咲夜がどう出るか様子を見ようとしていたが、膝がガクガクと震えて言うことを聞いてくれない。

「動けないのは当たり前でしょ？これだけ無理をしているんだから、限界がきてすぐ動けなくなるのは目に見える」

咲夜がそう言つて私に近づいてくる。使つていた大太刀ですら持てなくなつていた私はそれでも大太刀を振ろうとしたが、その重量に振り回されかけたのともう持つていられずに地面に落としてしまう。

拾おうとしたが、咲夜が目の前に現れて私の胸を手に持つては鋭利な銀ナイフでぶつた切つてくる。

「か……あ……！」

胸を押さえる私に休む暇を与えずに、咲夜は続いて私の脇腹に銀ナイフを突き立てた。

ひんやりと冷たくて鋭利な刃物が私の体の中にもぐりこんでくる感覺というのは、何百年も生きてはいるがやはりなれるということではなく、その不快感は耐え難いものだ。

「……っは……ぐ……っ……！」

咲夜が銀ナイフを私の体から引き抜くと、そこからダムが決壊した時の水のように、真つ赤な血が噴き出してくる。

そこで気が付いた。咲夜はタイムパラドクスを使つたもので私を騙したとき、私が彼女に切りかかつた手順を真似ているのだ。

つまり、この次は、

「…………あ…………」

私の声は咲夜に切られる前に出たものなのか、切られた後に出了たもののかは定かではない。もしかしたら切られているときかもしれない。

でも、そんなことはもうどうでもいいことだ。

視界に映る景色が私の意識に関係なくグルグルと様々な場所を移し、最後は地面にぶつかることで動きを停止する。

視線の先には見慣れている自分の体が、首から血を吹き出しながらゆっくりと崩れて

いくのが見えた。

「……」

生物は首を切断された瞬間に即死するわけではない。首を飛ばされて数秒後には死ぬわけだから即死とあまり変わらないが、血が脳にめぐるわずかな時間は見たり聞いたりすることができるという。

近くに立っていた咲夜が片目が潰れて半分しかない視界の私に、近づいてくると目の前で立ち止まって私を見下ろしながら呟いた。

「さすがは白狼天狗……まだ意識がるようですね……ですが、今……楽にさせてあげましょう」
咲夜が足を上げて私の頭に向けて足を下ろし、頭蓋を踏み碎いた。木の枝が折れるのとそう変わらない乾いた音が頭の中に響くと同時に、脳を破壊されて私の視界は真っ黒に染まる。

私の意識はそこで途切れ、何も考えることができなくなってしまう。

眠るとは違う、一度途切れたらもう戻ってくることはできないだろう。それはある意味では眠るということにている。

私という意識は消え去った。